
魔王様のリコル

aaa_rabit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様のリコル

【Nコード】

N5241N

【作者名】

aaa_rabbit

【あらすじ】

逢坂亜里砂20歳。ある日突然、召喚された目的は魔王様の花嫁！？のほすですが、今日も元気に魔王様のリコルを勤めています。

リコル様、召喚

一人暮らしの私はいつものようにご飯を作り、一人で黙々と食べていた。

お母さんのご飯が懐かしい。一人暮らしをしているとお母さんのありがたみがよく判る。一汁三菜を毎日作るのがこんなに大変なことだなんて知らないままだったろう。

部屋の静けさを掻き消すように、適当にテレビの電源を入れる。ブラウン管から笑い声が聞こえてきた。

くだらないことで笑えるテレビの芸人達やサクラが羨ましいな。私だって笑えるもんなら笑いたいよ。

つまらないなとテレビの番組を変えようとリモコンを取った時、それはいきなり現れた。

とぶんとコールタールのような液体が突然私のお尻の下に溢れてきたのだ。ややひんやりしていて、ちょっと気持ちいいかも、なんて呑気に考えてる場合じゃない。まるで誰かが操っているかのよう。にそれは私を中へと引きずり込んでいく。

「助けて…!!」

無我夢中で腕を伸ばす。咄嗟に掴んだのは…孫の手!?

とぶんと液体が一度うねり、芸人達は何事もなかったように笑っていた。

リコル様、召喚（後書き）

これ以上連載増やしてどうするよ!?!という感じですが、やっっちゃいます。他の作品に比べ、鈍足更新になりそうな予感。最後はハッピーエンドにします。

リコル様、リコルになる

水死は苦しいからやだなあなんて暢気に考えていたら、視界を埋めていた闇は唐突に消え去った。

そして目に入り込んできたのはこれでもかという位美形な人達。金銀銅なんて当たり前。中には鮮やかな緑やピンクなんて頭もある。彼等は一様におおと溜息を漏らし、私を拝んでいた。手には孫の手を持ったまま。あ、もしかして注目しているのはこっちか？なんて軽く現実逃避。

怪しげな宗教集団？

ドン引きしていると再び歓声が上がる。そちらを見れば明らかに外人だろう、金髪碧眼のギャルっぽい人と地味そうな栗毛色のお下げに厚底眼鏡の女の子が呆然と座っていた。

「ワオ！ナニコレ？ビックリショー？」

ギャルっぽい女の人が甲高い声を上げ、女の子は噁り泣いていた。そんな彼女達と私をコスプレ集団が囲む。

呆然としたまま、連れて行かれたのは風呂場で、三人まとめて放り込まれた。これまたナイスバディなお姉様方に身体を擦られ、マツサージされる。

お姉様方は私が訊ねてもあとでご説明しますの一点張りだった。あまりのVIP待遇に私と女の子は為すがままにされており、ギャルっぽい人は楽しんでいた。

そして今私達は黒いドレスに身を包まれソファに座らされている。

「オウチニカエリタイヨウ」

女の子が私に縋りついて泣く。服の袖で涙と鼻水を拭いてやりながら、どうなることやらと私は思案していた。

明らかに人種の違う私達なのに、言葉が通じているのはどういうこと？いやその前にここはどこだろう。少なくとも自分の家ではないことは確かだ。

俗に言われるトリップという奴か？でもあれは女子高生くらいになるもので間違っても二十歳の私が巻き込まれるようなものじゃないはず。唯一の相棒、孫の手は風呂場で取り上げられたので、手持ち無沙汰なのが寂しい。

テレビつけっぱなしだな、電気代どうしようなどと軽く現実逃避していると、これまた容姿の整った御方が入ってきた。

ギャルっぽい人は早速その人に豊満な身体を押しつけている。積極的だなあ。

「ようこそお嬢様方。ここは魔王城。貴方達をお呼びしたのは貴方達に魔王様の花嫁になっていただきたいからです」

涼やかな切れ長の瞳に白銀の髪を垂らしたその人は開口一番宣った。

ホワイ？なぜ？どうして？あ、訳しちゃったよ。

ギャルっぽい人はそんなのどうでもいいからあとちょっとその人を誘っているし、女の子は私に縋りついたままめそめそしている私を除いて誰も聞いちゃいない。てんでバラバラな花嫁達にその人は苦笑していた。

「あの」

「何でしょう？」

「なんで私達なんですか？人種も全く違うみたいだし、特別綺麗なわけじゃないし……」

ほっとしているのは間違いないだろう。話を聞いている人を見つけて見るからに安堵を浮かべていた。どうも気が弱そうだ。この人の説明大丈夫だろうか。

「それは貴方達三人の魔力が強いですよ。魔王様のお相手できるのは魔王様に見合うだけの魔力がないと死んでしまうのです」

「……そのためだけに呼ばれたと？」

「はい」

殴っても良いだろうか。一方的な召喚とやらで呼び出されて花嫁になれなどと人を馬鹿にしているとしか思えない。大体どこのおとぎ話じゃ！

「お断りします」

「え？」

よく耳をかつぽじって聞きなさい！

「お断りよ！すぐに家に帰して」

ぼかんとその人は私を見ていた。信じられないといった顔をしている。冗談じゃない、誰が喜んで花嫁になるものか。

「ヤアヨ。アタシハベツニイイワヨノコツテモ。アンタタチダケカ

エレバ？」

撤回します、一人いたみたい。

ギャルっぽい人が腕を絡めたまま私を一瞥した。どうやら彼女はここが気に入ったらしい。

「……ワタシモウチニカエリタイデス。イツシヨニツレテイツテク
ダサイ」

すっかり懐いてしまった女の子は私を見上げながら言う。兎に角帰らせて貰おうと立ち上がった扉へ向かった。

もともとそんなに気が長い方ではないのだ。お待ちをと絶る声を無視して扉を開け放つと。

どこのモデルさんですか？と聞きたくなるような長身美形の男が立っていた。何も考えずに膝をついてしまいそうな巨大な圧力を感じるが、それ以上に黒い瞳に興味がそそられる。

寂しい？

っとそれどころではない。私はここから帰るのだから。

男の横を通り過ぎようとした私だが、浮遊感を感じた時には男に担がれていた。へ？と目を丸くする私に男は室内を一瞥し。

「……リコル」

ギャー！変態！人の尻を撫でるな！

男はそれ以上一言も喋らず、私に待ったをかけた人だけが、男に

向かって一方的に話していた。

ですが、しかしなどと言っていたが最後には溜息をついて判りましたと辛うじて聞こえた。人一人持ち上げてるのに重くないのかな？力持ちだなとか考えていれば、くるりと視界が動き振動を感じる。

「ちよつと、待ちなさいよ！降ろして！」

暴れる私をもともせず、扉が閉じられる直前の気の毒そうな白銀の人の視線が印象的だった。

リコル様、お風呂に入る（前書き）

短めです。

リコル様、お風呂に入る

訳も判らないまま男の人に担がれて、そのまま寝台に放り投げられたのが数時間前。

そして今、度アップで美しい容姿を眺めている私です。うわ、睫毛長い。引っこ抜いたら怒られるかな？

ずっと鼻筋は通って薄く開かれた唇からは寝息が漏れている。現在の私は彼の抱き枕状態。逃げようにも腰と背中をがちり抑えられているために脱出は不可能なのだ。

力尽きたせいで途中寝てしまったのだが、次に私が起きても彼は全然起きる気配がないので、仕方なく観賞している。

摘んだら起きるかなとそろそろと手を伸ばそうとした時、ぱちりと目蓋が開けられる。黒い瞳同士がぶつかった。

「……」

「……」

何度か瞬きした彼は上体を起こして欠伸を漏らす。身動きできなくてがちがちだった私は寝転がったまま思いきり伸びた。ばきばきと鳴るのは気のせいではないだろう。いくら寝台が柔らかくろくと、長時間同じ格好をしていれば身体は強張る。

そんな私の様子を見ていた彼がほんの少しだけ目元の筋肉を緩ませていた。

てつきり表情筋が固まって動かないと思っていた私はぽかんとしてしまう。すぐに元の無表情に戻った彼は私の腕を引っぱって歩いていく。歩幅が違うので私は小走りだ。

「ちょっと待って！もう少しゆっくり歩いて……」

私の言葉にぴたりと止まった彼は私の頭を撫でた。はい？ふわりとまた浮遊感が私を襲う。前と同じように担がれて、脱力したまま私は大人しく運ばれた。

「やだってば！絶対嫌！……ぎゃー！」

女らしからぬ悲鳴が反響するここは浴室。そして私は、抗う体力もなくぐったりと男に身体を預けていた。人間何事も諦めが大切なのだと、この世界にきてから悟りを開いてしまいそうだ。

元の世界に戻ったら、仏教でも学ぼうかしらん？

性格には枯れていようが、これでも花を恥じらう乙女である。人並みに羞恥心だってあるし、男の人に裸を見せるなんて以ての外。だったのだが。抵抗虚しくドレスを剥ぎ取られ、その際ばつちり男のあれも見てしまったともさ！彼は気にした様子もなく私を膝の上に乗せて気持ちよさそうにお風呂に浸かっている。

裸の付き合い？hahaha！今時混浴なんてアタリマエデスヨ？

どうした？と言いたげに男は首を傾げている。というか、この人が口を開いたのは一度しか見ていない。話せないわけでもないのだろうか、無口な人だ。

お風呂の程良い温もりも相まって、ぼーっとしていると抱き上げられた。良い匂いのするシャンプーやら石鹸で頭と身体を洗われる。本日二度目の入浴です。それにしても、人に洗われるのは存外気持

ちが良い。羞恥心を捨ててしまえば、余裕も出てきた。男の手つきも女というよりペットに接するような感じなので特に危機感を感じることもない。

あれ今更？なんて思われるでしょうが、これでも普通に貞操の危機感はあるのですよ。

タオルで丁寧に水気を取られ、服を着せられる。まるで人形にでもなったみたいだ。さつき着せられた服より、大人しめで少しほっとする。さつきのが、黒いウエディングドレスだとしたら今回のパーティー用ドレスみたいだ。因みに髪もばっちりこの男がしてくれたよ。予想以上に結構なお点前でした。

今度は普通に手を繋いで歩く。体内時計で数時間前に初めて会った男と手を繋いで歩くのが普通かどうかはこの際置いて。どうやら彼は私の歩幅に合わせてくれるらしい。何度も角を曲がっていい加減何処か判らなくなった頃に目的地へ着いた。扉を守っていた美青年がこつちを見て頭を下げている。

リコル様、誕生日会に出席する

もしかしてこの人って偉い人なの？

開けられた部屋の中は。別世界だった。煌びやかに着飾った男女が談笑し見るからに豪華な食事が壁際に並んでいる。そんな彼等だが私達の姿を認めると会話をやめ、頭を下げていく。そんな中を私は男に手を引かれて歩いていった。

そして男が座ったのは一段高い、室内全体が見渡せる一番奥の――際豪華な椅子。そして私は、なんと彼の膝の上だった。

大勢の前で膝抱っこ。恥ずかしすぎて俯いている私を気にすることなく、男は隣に立っていた人に合図した。合図を受けてその人が声を張り上げる。

「この度は第六代魔王ルーデリクス様の生誕祭にようこそいらっしやいました。今宵は無礼講。思う存分お楽しみください」

この男が魔王！？ぱつと顔を上げた私はまじまじと男を見た。黒一色に身を包んだ美しい男。一言も話さず、ぴくりとも動かない表情は逆に冷酷さを思わせる。

のだが、その瞳を見れば怖いとは思えなかった。吸い込まれそうな黒水晶は穏やかな暖かさを宿しているから。

それにしても居心地が悪い。挨拶に来る人達は興味深げに私を観察しているし、魔王様はつまらなさそうに片手で私の長い黒髪を手で遊んでいる。

「ご生誕おめでとうございます、魔王様。そちらの方は、陛下の新

しいお妃さま？」

「……」

「なんだ違うのか。……ええー本気ですか？判ってますって」

緑色の髪をした肉食獣を思わせる男が魔王様と会話を成立させていた。というか魔王様は一言も喋ってないのになんで判るんだろう。不思議。

そんな私の視線に気づいたのか、彼の興味が私に映った。

「初めまして陛下のリコルさま？美しい髪と瞳をお持ちですね」

「は？いやいや貴方の方がうんと綺麗です」

「またまた謙遜を。高貴なる色をお持ちではないですか？」

どうやら黒は高貴な色らしいです。お、もしかしてこの人なら教えてくれるかも。

「あの、名前を教えてくださいませんか？」

「ああ、それは失礼。俺はワーウルフのトップを務めてるジェイルって言います」

「ご丁寧にも。私は逢坂亜里砂です。ところで状況がさっぱり判らないので教えてくださいませんか？」

「え？アリサ様はこの度召喚された花嫁の一人なんですよ？ブルーフから説明を聞いたんじゃないんですか」

お互い顔を合わせる。どうやらかなり食い違いがあるらしい。

「……陛下。いやいや知らんじゃありませんって！」

折角整えていた髪を掻きむしったジェイルがこちらへどうぞと近くの部屋までエスコートしてくれる（魔王様が放してくれたので）。

興味深げな視線がびしびし飛んできたが、私はひたすら無視した。扉を閉じて何事かジェイルが呟けば、聞こえていた音楽が途切れた。

「音を遮断したんですよ。あまり聞かれたくないんでね」
「そうですね」

密室に男と二人きりというのは緊張するものがあつたが、察したジェイルは一定の距離を開けて座った。気遣いに感謝しつつ一通り今把握していることを伝える。

いきなり魔王の花嫁として召喚されたこと。家に帰ろうとしたら魔王様に連れて行かれたこと。

そして全然知らないのに慣れかけていた自分に愕然とした。

「それはまたお気の毒に……。そうですね。とりあえずあの方が魔王様だとは判りましたよね」

それはまあ、見れば一目瞭然だろう。

「じゃあ貴方が陛下のリコルだって事は？」

「リコル？」

「ええとですね。人間界というペットってやつかな？」

「ペットお？」

ちょっと待て。私はいつ魔王様のペットになった、いやされたのか？言われてみれば今までペット扱いだっただと思えば色々と頷ける。じゃなくて！

「私は誰かのペットになるつもりはありませんしすぐに家に帰してください！」

「ごめん。無理なんです」

「なんで？」

「召喚の儀式は一方通行なので。アリサ様の世界で魔術を使える人間がいれば可能なんですけどね」

地球では魔法なんて架空上のものだ。職業魔法使いなんて頭がおかしい人だけだろう。

つまり二度と家には帰れない。突きつけられた事実で全身の力が抜けた。一人掛けのチェアに身を預け、柔らかな感触に埋める。その答えは何となく予想していた。考えたくはなかったけれど。

「この世界はどんな世界なんですか？」

生きていくには現実を受け止めるしかない。腹を括りましょう。

リコル様、誕生日会に出席する（後書き）

12/12サブタイトル変更。ストーリー上、まずいので。

リコル様、世界を知る

ジェイルは驚いていた。てっきりこのまま泣き喚くか、我を喪うかどちらかだと思っていたのだ。思っていた以上にアリサという少女は強かつたらしい。

「この世界は三つに分けられます。一つは天界、もう一つがこの魔界。そして二つに挟まれた人界。天界と魔界は一人の王によって統治されていますが、人界を統べる人間達は極端に寿命が短いせいか、小競り合いが絶えないようですね。そのため代々の天界の長と魔界の長はそれなりに交流はありますが、人界とはほとんどありません。むしろ一方的に召喚されて、我々も天界の者も困っている状況です」「ふうん。でも私も人間だよ?」

「違いますよ!リコル様は歴とした魔界に属する者。愚かな人界の者と一緒にしないでください」

「えー」

「強大な魔力の器、高貴なる色を宿した瞳と髪。我らが王と並び立つのにこれ以上相応しい者はありません!」

力説されアリサはあと答えるしかない。これ以上重ねても無駄だと悟ったのだ。

「そして魔界は……おっとこの辺で今回はやめましょうか。陛下が呼んでます」

「そうなの?全然聞こえないけど…」

「慣れれば判るようになりますよ。さあ、いきましょリコル様」

どうやら会場ではなく別のところへ行くようだ。一体どれだけあるんだと思われる長い廊下をジェイルと歩いていると、途中で柱に

凭れかけたルーデリクスが腕を組んで立っていた。ジェイルに促され、ルーデリクスへと向かう。少し距離を開けて立ち止まったアリサをルーデリクスが狭めた。

「何もやってませんよ陛下。今夜にでも本人に確認してみればどうですか？…はは。おっとでは御前失礼します」

ひらりとアリサに手を振ってジェイルの姿が唐突に消える。これも魔術の一種なのかと感心していると、強い力で手首を取られた。ぐにやりと風景が変わり、いつの間にか寝室に。

入浴の時と同じようにばいばい服を脱がされ、パンツ一枚のアリサにルーデリクスが上下のパジャマを押しつけた。どうやら着るといわれているらしい。裸を一度見られたせいか、羞恥心はどこかに置き忘れたようだ。

遠慮することなく素肌の上にシャツを羽織った。明らかに男物。ルーデリクスのものだろうか。ぶかぶかだったのでシャツとズボンの裾だけ折ったのだが、ウエストが全然違うので、動くたびにズボンがずり落ちてくる。四苦八苦しているとルーデリクスがズボンだけを脱がせた。シャツだけでも十分膝丈まであるのでいいだろう。

頷き、ベッドに寝転がったルーデリクスが自分の隣を叩く。アリサが恐る恐る横になると引き寄せられた。アリサの顔がルーデリクスの胸に当たる。優しく撫でられているうちにいつの間にか小さな寝息を立てていた。

眠ってしまった少女、アリサの頬に口づける。擦ったそうに身を擦りながらも、起きる気配はなかった。昼間に十分な休息を取ったので目は冴えている。ただアリサの緊張の糸を緩めてやるには睡眠が一番だろう。あどけない表情が月光でぼんやり浮かび上がる。自

分と同じ黒髪を指に絡めながらアリサは不思議な少女だと眺めていた。

魔属の頂点として比類無き魔力を有する自分と同等の力を持つアリサ。初対面の時から真つ直ぐに目を合わせてきた。それがどんなに難しいことかアリサは知らないだろう。無意識に外へと流れる魔力に大抵は堪えきれず、屈して膝を折るか弱い者は失神するのだ。だからルーデリクスは王でありながら他者を傍に置かない。寂しいという気持ちは、とうの昔に消え失せてしまった。魔力を制御できないことは無いが、面倒なので放置してある。

花嫁などいらなかった。だから、連れてこられた花嫁は臣下に下げ渡そうと神官に伝えに行ったのだ。そこで偶然会ったアリサ。臆することなく直視してきた者は初めてで。気づけば、アリサをリコルと呼び、誰にも近寄らせない自室へと連れてきていた。疲れていたのかもしれない。抱き寄せた柔らかい肢体は予想以上に睡眠を促した。普通は無防備な姿を見せることに躊躇いを憶えるものだが、アリサに限ってその考えは全く浮かばなかった。実際、目を覚ました時にも喰われた様子はなかった。何処か当然と捉える自分がいて戸惑ったが、リコルならば主人に逆らわないのは当たり前のことだ。今も安心しきって身体を預けるアリサに不快だとは思わない。兎がライオンの前で昼寝をするようなものだ。しかし、自らの牙を立てようとは、あまつさえ繁殖行動を取る気は全く起きない。性欲は人並みにあるが、魅力云々を前に腹上死されるのが嫌だったのだ。この魔界で膨大なルーデリクスの魔力を受け止めきった女などいなかった。良くて最後まで行為をした後に原形を留めているくらいだ。アリサならば、同等の力を持つアリサならば耐えられるかもしれない。強い伴侶を求めるのは魔属の本能だ。極上の女を前にして耐えているのは、偏に無くしたくなかったから。単なる気まぐれだ。興味を失えば魔力を奪うなり、子種にするなりすればいい。

囚われたのは果たしてどちらか。
長い黒き夜はまだ明けない。

リコル様、世界を知る（後書き）

前半は続き、後半は魔王様の独白です。魔王らしい残忍らしさとリコル様に興味を持っているという部分が伝わっているといいです。

リコル様、お勉強をする（前書き）

リコル様の日常編といったところででしょうか。適応能力の高い彼女は早くも馴染んでおります。

リコル様、お勉強をする

柔らかな朝日を浴びてうつすらと目蓋を開けたアリサは、被さっていたルーデリクスを押しつけて大きく伸びた。夜遅くに帰ってきて寝たのだろう。魔王は意外にも忙しい職業のようだ。とはいえ、抱き枕にするのもどうだろう？夜に庭で寝ていても、朝になればこうして抱きしめられているのだから、いい加減扱いても慣れてきたが、アリサを求めて彷徨う腕を避けてベッドから降りる。そのまま寝室から出ようとしたところで寝台に戻された。見れば不機嫌そう（全然見えないが）半眼の瞳が逃げるなど告げていた。これも魔術転移という魔術を使ってアリサに戻したのだ。己の腕に閉じこめたルーデリクスは満足して目を閉じる。

抵抗しても無駄だということは数日のうちに学んでいたので、諦めて二度寝することにする。起きたばかりだからか時を立たずに夢の世界へ旅立った。

「寝坊！」

叫んで立ち上がるうとしたアリサは水音にあれと下を向いた。目を丸くしてルーデリクスが見上げている。今度は寝過ぎたらしい。朝に湯浴みするのは日常で、すくとアリサは湯船に身を隠す。全身を毎日見られているのだが、恥ずかしいものは恥ずかしい。

これもまたいつもの如く身体を洗われ、出たあとは朝食だ。魔属にとつての食事は種族ごとに違うらしい。例えば先日会ったジェイル達獣族は、肉を好むし淫族は精を好む。腐肉を好む一族や魔力を糧とする一族など千差万別なのだ。ルーデリクスはアリサのような人間と食事が同じなので助かった。

その後は、別れてルーデリクスは執務へアリサは勉強の時間になる。この世界に住む以上、生きる術を学ぶのは大切なことで、積極

的にアリサは学ぶ。

「今日はここまでにしましょうか」

極上の美少年が分厚い本を閉じて授業の終わりを告げた。彼は淫族の次期族長でありながら学者なのだ。ルーデリクスの変請でこうしてアリサに教鞭を執ってくれる。

それにしても眼福だ。人型を取る種族の中でも淫族は特に美しい。食事を得るために己が武器とするためか、力のある者ほど容姿が秀でてゐるのだ。アリサの目から見て、ルーデリクスの次に美しい一族だと思う。それを伝えれば齒が浮くようなアリサを讃える言葉が並べられるので口にしなないけれど。

あれは本気で恥ずかしい。

「ありがとうございます、シエナさん」

「私のことはシエナで結構ですよ、リコル様」

「だったら私も名前と呼んでくださいってば」

同時に相互を崩す。しばらく明るい笑い声が室内に響いた。

「それにしてもリコル様は優秀ですね。このままでは直ぐに私はお払い箱になりそうです」

「そんな私なんてまだまだですよ。魔術だってまともに使えませんし」

「おや。サハンの教え方が下手くそなんですか？それでしたら私が…」

「誰が下手くそだってシエナ？俺以上に上手い教師なんていないって。なあアリー」

「サハン。もうそんな時間ですか」

「あゝ違う違う。俺が早く来ちまったただだから気にすんな」

迎えに来た魔術の教師サハンの登場にアリサは席を立った。しかしシエナにお茶のお代わりはいかがですかと誘われて座る。当たり前のように空いた席にサハンが座り、嫌そうにしながらもシエナがお茶をサハンの前に置いた。

「はあ……。魔力って何なんですかね」

「アリーの場合そうだな、コップ一杯の水を入れるのにバケツの水を一気に流すようなもんなんだよな」

「つまり過剰に出し過ぎってことですよな？」

「ぶっちゃけそんな感じだ。なんていうかもっと繊細なんだよな、魔術ってのは。力任せにやればいいってもんじゃねえんだ」

「貴方の口から繊細なんて言葉が出るなんて。明日は星が落ちるかもしれないですね」

「失礼な。それでも俺は魔界一のガラスハートを持つてるんだぞ」

「魔術なんて勘ですよ、リコル様。強い意志と伴う魔力。それさえあれば大丈夫です」

「俺のことは無視か!？」

「うゝん。頑張ります」

強い意志。つまりイメージすること。例えば移動したいと思ったら、まずどこに移動するのかを明確にする。次にどのように行きたいのか。ドアを開ければ別の部屋に繋がるとか、風景の一部が突然切り取られて別の移動先の風景に変わるとか、とにかくあり得ないと否定したら発動しない。自分のイメージを否定しないことがまず第一。

そして次にイメージを叶えるために魔力を解放する。のだけど、アリサはここで躓いているのだ。どの事象でどれくらいという基準があるらしいのだが、アリサには魔力というものを感じられない。

最近少しはこれかなという漠然としたものは感じられるようになってきたが、はつきりとは認識していないのだ。

周囲にいわせれば魔王に匹敵する魔力を保有しているみたいだが、使用法以前の問題なので今のところ自分が凄いととは思えなかった。

ようするに宝の持ち腐れって奴ですね。

まあでも、あのルーデリクスと四六時中傍にいられるだけで凄いらしい。何でも彼は常々魔力を放出しているので、流れ込んでくる魔力が半端ないのだとか。麻薬みたいなものでふらふらつとしちゃうのだ。私の場合自分自身が垂れ流し状態なのでルーデリクスの魔力に飲まれることなく正気を保っていられるらしい。あの顔だけでも垂涎ものなんだけど、ようは慣れだ。元々日本人は謙虚な国民だから。

「もういい…。どうせ俺なんて…」

「キノコを繁殖させないでくださいね。メイドさん達が大変ですから」

「いい性格してますよね、リコル様」

「いゝえゝ。シエナさんには負けますよ」

「何の。リコル様には及びません。僕はそこまで非道じゃないですから」

「あら。私は単に事実を述べただけ」

寒々しい笑い声にサハンがぶるりと身を震わせる。触らぬ神に祟りなしとはこのことだろう。とはいえ少し不味い状況になってきた。アリスは気づいていないだろうが、感情の起伏によって魔力垂れ流し量が増減する。そして、現在あり得ない速度で広がっている。きつと邪なことを考えたからだろう。止めないと、でも間に入る勇気が…。

「あ、陛下がお呼びだぞアリー」
「行ってしまったようですね。助かりました」

陛下が移動させたのだろう、アリスの姿が無くなってシエナとサハンは汗を拭いた。けしかけたのはシエナだが、色々危なかったのだ。

「お前なあ。あんまりアリーに黒いこと考えさせんなよ」

「好奇心が勝ったんですよ。ほら、家にも元花嫁を預かっているの
でどれ程かと」

「程々にしろよ。アリーは桁違いだ」

「だから陛下もリコル様をリコルにしたのでしょようね」

召喚された花嫁はいずれも魔力が高い者達だった。その中でも一
際高いのがアリス。残りの二人は臣下に下げ渡され、それぞれ淫族
と伏魔殿に嫁いでいった。アリス曰くギャルっぽい女の人が淫族、
大人しい少女が伏魔殿。魔力も高く、性的欲求も多い女はすつかり
淫族に馴染んでいる。族長自ら可愛がるくらい女は淫族に歓迎され
ていた。

「マリーはうつてつけでしたが、リコル様では逆にこちらが喰われ
るでしょう。私はリコル様の方が好みなんですけどね」

「死ぬのを覚悟でやるのも有りかもな」

強大すぎる魔力は他者を遠ざける。魔王然りアリス然り、一定以
上に長時間近づけばいくら魔力の高い一族であろうとも身を滅ぼす。
それ故に不可侵なのだから。

リコル様、お勉強をする（後書き）

10/25 家の事情により、これから2、3週間ほどインターネットに接続できない状態とお知らせしましたが、あれはなしになりました。詳しくは活動報告にて。

リコル様、首輪をつけられる

何の前触れもなくぐにやりと歪み、気づけばルーデリクスの膝の上。
上。

この人本当に私を膝の上に乗せるのが好きだよね〜ってあれ？オコッテマス？

「…アリサ」

「うひゃい?!」

突然名前を呼ばれて吃驚するアリサ。彼は長い指先でアリサの額をとんと軽く押した。めっ、とどうやら怒られているらしい。のだがどれに対して？

「リコル様が流した魔力で現在魔王城の半分が機能を停止してるんですよ。自重してください」

はて？と首を傾げたアリサにジェルさんが魔王様を翻訳する。あ、ジェルさんて実は魔王様の宰相さんで、魔王様のアイコンタクトだけで意味を理解する凄い人なのだ。魔王様の翻訳をしてくれるので助かっている。なんとなくの感情は判るようになったけど、細かいことはただ見ただけじゃ判らないのだ。

「あ、はい。ごめんなさい」

「……」

「暫く陛下の元で落ち着けてからにして下さいね。謁見者も全員当てられたみたいだから今日はもう終わりだな。ああ、そっだ陛下。頼まれたものを用意しましたよ」

懐から出されたのは腕輪？にしては随分と大きいようだ。銀細工の鎖が複雑に絡み合い、赤いルビーがぶら下がっている。綺麗だなあと覗き込んでいると、魔王様に肩を押さえられた。あれ？なんか嫌な予感。

「あはは…。ルード放して？ジェルさんも怖いですよ」

「何も怖くありませんよ、リコル様。ちよつと失礼」

身動きがとれない私の腕、ではなく首に手が伸ばされる。これっていわゆる首輪？あはは。……こんちくしょー！

魔術によって接合部分は全くない。要するにとれないって事だ。

良くお似合いですよとジェルさんが言っているけど冗談ではない。魔王様も無表情には変わりないけど嬉しそうだし。

「これはリコル様の魔力を相殺する魔具なんですよ。陛下直々の魔力が込められていますから、暴走しても危険はないです。思いつきり魔術の練習をしてください」

「ついでにリコルだと周囲に知らしめるため？」

「…その髪と瞳を見れば一目瞭然ですよ。ああ、本日は陛下とお過ごしく下さい。むしろ使い物にならないんで引き取って下さい」

さらりと本音を咬ましたジェルは男気たつぷりな礼をして出て行った。ちよつと待つてください。このまま放置しないでー！

アリサの絶叫も虚しく、あれだけ重たい扉をあつさりと開けてジェルさんは出て行ってしまった。全体の強度が増している分、扉とか物が重たいのだ。アリサでは開けられないので、大抵誰かが開けてくれるのを待つしかない。

遠くを見つめているとくいと髪を引っばられた。

何でしょうか？

「昼寝？」

ふるふる

「お風呂？」

ふるふる

「ご飯？」

ふるふる

「散歩？」

じつくり

大の大人がそんな仕草をしても気持ち悪いだけだがルーデリクスがやれば可愛いになる。美形の神秘か！と思いつつ手を繋いで謁見室を出た。

「やっぱり外は気持ちが良いね」

「ごろりと芝生の上に寝転がったアリサは空へと手を伸ばす。魔界といえば、年中闇夜に覆われているイメージがあるけれど全然違う。というより地球とあまり変わらない。太陽が2つあって月が5つあ

るところがちょっとおかしいけど、四季だつてあるし草原もある。そう。今いるのは草原。見渡す限り、青々とした緑が眩しいくらいだ。ここは魔王城の敷地内。魔王城は50キロ四方あるのだ。凄すぎです。城は国の権威だけれどやりすぎではないか。そう聞いたところ、シエナさんから返ってきた答えはこれでも家の敷地（淫族の本拠地）よりは小さい、らしい。どれだけでかいのよ。

ちなみに魔王城本体は大体全長10キロ。つまり5分の1が建物にとられ、他は演習場や食料庫、牧場など様々ある。10キロの家なんてあり得ないと思うだろうが、魔王城へと登城できる者は全員転移魔術（高位魔術に匹敵する）が使えるので問題ないらしい。勿論私はそんなもの使えませんよ。だからシエナやサハンの勉強部屋は私を通える範囲内に設置されている。王の居室近くまで行けるのは二人をルードが許可しているからなのだ。

風に任せて目を閉じているルードは文句なしに格好いい。というか、夏のサイダーの宣伝とかに出てきそうなシチュエーションだ。ちよつとだけ面白くなって、状態を支えている片手のバランスを崩してみる。えっ？？って感じで私を見ているルード。重力に逆らわず柔らかい草が受け止める。

「これの仕返し。ちよつと怒ってるから」

自分の力が制御できないから迷惑をかけてるのは判っている。でも、なんかルードの所有物って感じていけ好かない。実際ルードのリコルなんだけどね。気持ちの問題かな。これが外される時はいない時なのかなって思うと悲しいから。

悲しみが伝わったのか、大きな手が頭をよしよしと撫でる。抱き寄せられて背中をリズム良く叩かれた。完全な子供扱い、いやペッ

ト扱いなのだろうがアリサは気に入っている。この腕の中は安心でき
るのだ。温かい陽射しにとるとると目蓋が閉じていった。

リコル様、交流を深める（前書き）

連続投稿第一弾。続きは明日の予定です。

リコル様、交流を深める

「忌々しい。なんであの子ばかり」

水晶球には麗しき美貌の魔王に抱かれて眠っている女が映っている。豊富な胸が零れそうな際どい恰好をした女は苛々と整えられた爪を噛んだ。なぜ自分ではなくあの女が選ばれたのか。

美しい魔王の隣にはあたしのような女こそが相応しいのに。最初に会ったのが自分であれば今頃あそこにいたのは自分だろうと女は確信していた。

「魔王様を手に入れるのはこのあたしよ。あんたは相応しくない」

美しい顔を醜悪に歪めながら女は嗤った。そして男達はそんな女をうっとりで見上げながら手に足に腕を伸ばした。

召喚されてからかなり経った。最初は日付を数えていたのだが、今はそれすらしていない。相変わらずアリサは魔王様のリコルとして飼われている。シエナの講義はなくなり、魔術の訓練以外は好きな時間を過ごしている。処構わず魔王様がアリサを拘束することはあるけれど至って平穩に暮らしていた。

「それにしてもつままないなあ」

アリサの身体は以前と変わらない。成長期は終わっているから後は緩やかな老いが待っているはずなのだが、訊くところによると強大

な魔力を持つ者はほとんど老いな……こほん、成長しないそうだ。永遠の20歳というやつらしい。髪とか爪は定期的に切っているの
で代謝はしているのだろうけれど。

少しずつ魔力の制御を憶えてくるのに伴い、行動範囲が広がったアリサには専属の従者が付いている。彼は竜族の族長の末息子でサハンの弟さんだ。竜族は魔界でも群を抜く魔力を持っているそうで、ルーデリクスの首輪によって制限されている私の魔力に当てられることがないのが一番の理由だ。しかも魔術に秀でているので教師としても優秀なのである。魔力を自覚するようになったアリサは以前よりも増しているようで、外せば正気を保っていられないとジエイルさんが教えてくれた。自覚があるか無いかの差は大きいのだ。

「ザイ。腹踊りやって」

「ハラオドリ？何でしょうかそれは。教えてくださればやりますよ」

この従者はとっても真面目な美少年。金の髪と金の瞳を持つソプラノボーイは人形のように可愛いのだがかなり堅物で融通が利かない。それを見越して専属にしたとしたら嫌だなあ。

「外に出たいよ」

「我慢なさって下さい。今は四年に一度の大議会の準備に追われているんですから」

夏のオリンピックならぬ春の大議会。魔界に住む一族のお偉方がこぞって参加する大規模な議会が行われるのだ。そのため今やすっかり茶飲み友達のシエナや魔術の先生であるサハンは領地に戻っている。ザイことザイステールも戻らなくて良いのかと聞いたところ、彼はまだ成人していないので問題ないらしい。

ルーデリクスも帰ってくるのは日にちを跨いでからで、朝は風呂だけ一緒に入って直ぐにお仕事に行ってしまう。話し相手はザイだけという味気ない日々を送っているのだ。ルーデリクスも話し相手としては不的確だが、ここ二年で何となく言いたいことは判るようになっていた。魔王翻訳機、ジェルには負けるけれど。

「もう我慢の限界！ちょっと遊んできます」

「どこへ？」

「城門。門兵さん達と仲良くしてくる」

いざというときのために。脱走とかする時便利だと思うしね。

というわけでランニングです。これだけぐーたらしていると絶対太ると思ったのは大違い。なんせ城の端まで10キロあるので移動で十分消費できるのよ。お陰様で元気澁刺なんだけど、ドレスがねえ邪魔なんだ。

魔界では高貴な色＝黒で纏えるのは魔王様だけ。ルードのリコルである私も黒を許されてる。というか黒服しかもらえない。着れば別にいいんだけどさ。デザインが違って同じ色だとちょっとつまらないよね。着せてもらってるから文句は言えない、というか却下された。(既に経験済み)

「アリー様。僕が運びましょうか？」

「いらないうつ、けど涼しい顔で走られるとむかつく」

「は？」

「なぐんでもない」

肉体構造からして違つのでしょうがないけど悔しいじゃん。汗一つ流さずに走ってるってさ。ずるい。

リコル様、交流を深める（後書き）

えーと、短めですが、きりの良いところで一旦切ります。その分後半長いのでお許しを。

リコル様、膝の上からご挨拶

「リコル様ではありませんか。お久しぶりねえ」

反対側から歩いてきた美女にアリサは足を止めた。綺麗な美青年集団に囲まれダークグリーンドレスに身を包んだ妖艶な美女がいたのだ。

「マリアさん。相変わらず綺麗ですね」

そのむっちむちな胸を分けて欲しいですよ。

襟割りの開いたドレスを着こなすマリアはこころごとく笑う。

「あらあ、陛下に可愛がられている貴方には負けるわあ。大股で走るとはしたないわよ。…あら素敵な人を連れているのね。陛下には飽きられちゃったのかしらあ？」

取り巻き連中が追従して笑う。マリアさん。私と同じで花嫁として召喚された一人で例のギャルっぽい人。ボンキュッボンでお肌もつやつや。汗水流しながら走っている私とは大違いだ。きつすぎる香水が鼻につく。

「無礼な……っ」

「はいはい、そこまでザイ。マリアさんも大議会のために見えたんですか？」

「ええ。パースに呼ばれたのよ。シエナ様やジェイ様も一緒に後から来たの。これから陛下と顔合わせがあるし、暇なペットと違ってあたしは忙しいのよ」

「でしょうね。だったら先を急いだらどうですか？のんびり歩いて

いると締め出し食らいますよ」

王を待たせるなんて以ての外。

高笑いしていたマリアさんの顔が一瞬歪む。扇で口元を隠してそうしますわあと行ってしまった。最後に私を睨みつけるのを忘れな。やっぱり嫌われてるよなあ。

「あの女は随分と無礼ですね。どうしてアリー様も怒らないんですか？」

「めんどくさい。それにマリアさんは同じ世界出身だからあまり悪口言わない方がいいんじゃない？」

「淫族程度に下げ渡されるような女は僕の敵ではありませんよ。アリー様は陛下のリコルなんですからアリー様を馬鹿にすることは陛下を馬鹿にするのと同じなんですよ」

魔界では力が全て。魔力が高ければ高いほどヒエラルキーの上に乗属する。因みに淫族は立派な上流階級です。片手で数えられるくらいには入るそう。でも竜族はそんな彼等の頂点に位置しているから、偉いんです。この国のナンバーツーですよ。

「あれはまあ、やっかみみたいなものだから。相手にしないのが一番」

「アリー様がそう言うなら追求しませんか……」

私のために怒ってくれるなんて良い人だよ、ザイ。マリアさんは多分私がルードのお気に入りなのが嫌なんだろう。同じ花嫁だったのに何であんただけ選ばれるのっていう嫉妬みたいなもの。私みたいなちんちくりんが傍にいるのは許せないんだろ。もう一人の花嫁だったスターシャは、今の生活に満足しているみたいだね。彼女は伏魔殿のあのブルーフさん（気の弱い術師さん）の所でお世

話になっている。あそこは夫婦で熱々な。もうすぐ第一子が産まれるんだけど、楽しみだ。

ブルーフさんは元人界の生物、つまり人間で、魔力が異常に高いのだそう。あつちの世界で迫害されて魔界で暮らすことになったんだって。それで魔王様の憶え目出度く伏魔殿の術師として働いているらしい。女の幸せを考えると羨ましいかな。

そんなことをつらつら考えながら、目標まであと800メートルまで来たときあの感覚が来た。嘘！なぜこのタイミングで！？ザイが手を振ってお見送り。私の努力を返せー！と叫んだところで定位置に。抗議を込めて端整な頬を抓る。そこへ咳払いが聞こえようや。私は周囲を見回した。

「あれシエナさん。お久しぶりです」

「こんにちはリコル様。お元気そうですね」

「あ、はい。ところで…」

この状況は一体どういう事？ぎつと睨んだアリサに犯人は膝をとんと叩く。いや宥められても貴方が悪いんですよ。明らかにシエナさんの右斜め前で膝についている美丈夫は目を丸くしているし、ジエイルさんは頭を抑えている。目だけで射殺せそうに睨みつけているマリアさんも怖い。どう考えても場違いだ。

「陛下。謁見の最中にリコル様を呼ぶのは……ああ、はいはい。パース殿。こちらが陛下のリコル様です。お見知りおきください」

「お可愛らしいリコルですな、陛下。初めましてリコル様。私は淫族の族長を務めております、パースと申します」

「あ、こちらこそ初めまして。いつも息子さんにお世話になってます」

上位の者は不用意に名乗らないのが礼儀。逆に下位の者は自分の名前を明かすことで、敵対する意志がないことを示しているそうだ。それで、上位の者の名前を呼ぶのは無礼になるらしい。だから私も愛称であるアリーとかリコル様としか呼ばれない。初対面でジェイルさんが名乗らなかったのは、まあかなりあの時私を警戒してたからなのね。後日、丁寧な謝罪と共に礼儀も教えてもらったよ。で、逆に上位の者が下位の者の名前を呼ぶのは、その者を認めた証なワケね。傲慢に見えるけど、これが魔界の作法なのだからこういうものだと納得するしかない。

これでも作法は叩き込まれたので応対できるが、なぜ政治とは関係ない私が挨拶しなきゃいけないわけ？今日は門兵さんと仲良くしようと思っただのに。

「息子がリコル様のお役に立てたならよう御座いました。時間のあ
る時にもじっくり話を聞きたいですな」

「パース殿の時間が合えば是非。…ルード邪魔しないで」

「あつはつは。仲がよいのいいことです。これで魔界も安泰です
な」

髪を引っぱるルーデリクスの手を払ったアリサにパースが万民受けする笑顔を向ける。最後の言葉は聞かなかったことにしよう、うん。時間が来て淫族一行は謁見室を出て行った。笑顔で見送っていたアリサだが扉を閉じるなり詰め寄る。

「仕事に関係ない私を巻き込まないでよ。…最近会えなくて寂しかった？…だからってほいほい呼ばないで。恥ずかしいじゃんかー。

…駄目。まだお仕事残ってるでしょ。我が儘言うな。…ちよ、ジェイルさん！」

「今日は淫族が最後なので問題ないですよリコル様。あと明日からリコル様にもお披露目を兼ねて謁見して貰うので」

「聞いてない！」

「今決めたから。淫族だけ鼻屑するわけにはいかないですよ。リコル様は陛下ただお一人のリコルだから」

ぐつと言葉を飲み込んだ。自分の存在がどこに位置するか良く判っている。傍に置かない、いや置けない陛下が唯一許した者。陛下のリコルというだけで周りから敬われ、大切にされる。私の役割は子供を産むのではなくただ傍にあることだけだから。肉体関係が全くないことを知っているのはジェルさんや近しい者だけだろう。大半はパース殿のように見ているし、私が子供を産むことを期待されてもいる。

「…判った。一時間だけ膝を貸してあげる。それ以上はやだ。足痺れるもん」

あ、機嫌が良くなった。言葉にしなくても伝わる。

これ以上私を甘やかさないで欲しい。でないと貴方なしでは生きられなくなる。

リコル様、お披露目（前書き）

サブタイトルを見て、あれ？と思われるかもしれませんが、話の都合上、こちらのタイトルの方が合うと思い、変更させていただきました。話の内容は前回の続きですので、ご安心ください。

リコル様、お披露目

あー眠い。ご挨拶してくれる皆様には悪いのだが、一体何時になつたら終わるのだろうか。

欠伸を噛み締めながら、アリサはひたすらに笑顔を貼り付けて挨拶を返していた。なぜこんな事になっているのかというと。時は少々遡る。

どうやら、前回ジエイルさんが告げた言葉は本気だったようで。丁度牧場へと出かけようとしていた私は執務に向かうはずのルードに強引に拉致、もとい抱きかかえられてルードの執務室へと一緒に連れてこられたのでした。

「ああ、陛下。ちゃんと連れてきてくださったんですね。……え？
だって、陛下のことだからリコル様を連れてくるのは半分の確率で……あはは、嫌だなあ。何も企んでませんよ」

例によつていつもの如く、私の席はルードの膝の上。ルードつては喋らないから、会話はほとんど目でしているのね。んで、ジエイルさんは普通に話してる。遣り取りを見るためには一々ルードを見上げなければならず、うん。首が凝ってきたよ。首の筋肉も鍛える必要があるなあ。ところで首の筋肉ってどうやって鍛えればいいんだらう？

と、そこでルードと目が合った。

本当にいいのか？つて。……えーと。ごめん、聞いてなかった。

やれやれと言った感じでルードは首を横に振っている。

失礼な！ルードの背が高すぎるのがいけないんだぞ。

私はこれでも平均身長より少しだけ小さいだけです。この世界の人達が大きいだけだもん。あゝ、はいはい。お世辞はいいからな。ルードの方が断然かわい……くはないけど、綺麗ですから。

「お二人とも。仲睦まじいのは俺としても嬉しいことですけど、二人で会話しないでください」

おっと、すみませんジェルさん。ほら、ルードのせいで怒られちゃったじゃないか。……え？うんそう、全部ルードが悪い。

因みにこの間、二人はただ見つめあっているだけです。

「陛下、リコル様。そろそろ俺の話を聞いてくれませんか？」

「あ、ごめんなさい。ええと、何でしたっけ？」

ルードがまだ話は終わってないとはかりに、一本に纏めていた髪の毛を引っぱるが無視。え？当然でしょ。ジェルさんの方が怒らせると何倍も怖いのは経験済みなのです。因みにルードは怒らせたことが無いから（内心はどうか判らんが）よく判らない。ルードの過去を知る某一族の長からは遠い目をして、凄まじかったとの一言コメントをいただきました。気になって後から本人に訊いてみたら曖昧に微笑まれた。あの無表情なルードが微笑んだ！とそっちに気

をとられて忘れてたけど、そういえば有耶無耶になったままだったなーと思い出す。うん、後で聞いてみましょう。

「ですから、リコル様のお披露目についてですよ。各族長に紹介しなければなりませんので、その打ち合わせです」

「はあ。……ってお披露目!？」

何そのちょっと恥ずかしいイベントは!？大体私はひっそりと窓際人生送るのが夢でして、決して目立ちたいわけではないんです。

「いや、そこまで露骨に嫌そうな顔しなくてもいいじゃないですか。ほら、陛下も拗ねてますよ」

へ？あーほんとだ。ちょっとぴり不機嫌そうだ。なんでー？そんなもん、マリアさんにもお願いしてください。……ふむふむ。アリスは私のリコルだから、って。

「……………」

思わず俯いてしまうのは仕方がないと思う。だって、その台詞、反則でしょう！あー、まともに顔が上げられない。私ってどちらか問われれば絶対にSだと思ってたのになあ。実はMだったとか。いやいや、断固としてSを推奨します！うう、意味が判らん。

ぐりぐりとルードの胸に顔を押しつけていたら、そっと抱き寄せられた。この時ジェイルは、ルーデリクスの機嫌がいつになく急上昇しているのを感じたのだが、空気を読むことには生憎と長けていたので邪魔することはなかった。暫くは無理だろうと判断して、一旦下がることにする。果たしてそれは正解だったのだが、人払いを忘れていたために、何も知らずに魔王の執務室を訪れた者は総じて

三日ほど使い物にならなかったとか。

結局パニックが収まるまで（何度か人が訪れたが、その度に回れ右して帰っていった）ずっとルードに凭れていて、漸く落ち着きを取り戻したところで、再びジェルさん登場です。なんてベストタイミングなんだ、ジェルさん。

「そんな睨まないでくださいよ。俺だって仕事です。じゃなきゃ、陛下のお世話なんてめんど……大変なので嫌ですよ」

今絶対、面倒くさいって言おうとしたよね、ジェルさん。

つい、生暖かい視線を送ってしまうのは仕方がないだろう。

「さて、落ち着かれましたか、リコル様？」

「お陰様で。いや、恥ずかしいところをお見せして申し訳ない」

「いえいえ、陛下の大変珍しい姿を見られたので、足し引きゼロですよ。ということ、本題に入りましょう」

「あ、はい」

何でも昨日の淫族との謁見が問題だったようで、淫族だけにリコル様をお見せするわけにはいかない。要約するとそんな感じ。

「というわけで、お伝えした通り、本日より陛下の謁見と兼ねてリコル様にも謁見していただきます」

「謁見と言われましても、一体どうしると？」

「笑顔で座っていてください」

「え、それだけですか？」

「はい。昨日の内にリコル様用の椅子を用意させましたので問題ありません」

問題はそこなんですか。陛下も脱走しないでしょーし、一石二鳥ですねとか嬉しそうに言わないでくださいよ、ジェイルさん！！というか、逃げるなよ、ルード！

「あー、そろそろケルちゃんが出産するらしくて……」

ケルちゃんというのは牧場で飼われているケルベロスのこと。中位の魔属であり優秀な魔王城の番犬でもある。ケルちゃんは現在妊娠中で、そのお役目は外されているのです。この妊娠期間がなんと八年。当時　といっても一年前のことだが　牧場を見学した時に、暇を持て余していたケルちゃんと出会ったのが切欠。その日以内に意気投合して時々話し相手になっっているのだが、出産経験二百年のケルちゃんによると、どうもそろそろ生まれるらしい。生命の誕生！素晴らしい事じゃないですか。ケルちゃんには名付け親になっしてほしいと頼まれているのもあって、是非そちらに行きたい。

「魔獣の出産はリコル様の参考にはならないと思いますよ」

ジェイルさんが真顔でそう告げる。ルードも頷いてるし。って、違ーう！……いやいや、そんな寂しそうな顔されても私とルードはそんな関係じゃないでしょうが！

「まあ、次代の御子様に関しては次の機会としまして」

「ちよつと待つてください、ジェイルさん。次の機会も何も、私とルードの間にそんなもの出来るわけ無いというか……。は、まさか魔属だと一緒に寝るだけで妊娠！？いや、でも私は人間だし」

ぶつぶつと己の考えを口にするアリサを放って、ジェイルは魔王へと視線をやった。

「陛下。我慢は良くありませんよ。……俺だって口出ししたくありませんけど……あーはいはい。判りましたよーっと。だから、そんなに睨まないでくださいって」

「ルード？」

二人の間の殺伐とした空気が即座に霧散する。何だ？とアリサに目線を落とすルーデリクスに気づかれぬようジェイルは背中に貼り付いた冷や汗を蒸発させた。流石リコル様。ジェイルは内心拍手を送る。何らかの遣り取りをしているらしい。言葉を交わさず無表情なルーデリクスに対してアリサが百面相した後、漸く向き直った。とても不満そうだ。魔王とは対照的なアリサについて和んでしまう。あまり褒めすぎるとルーデリクスに睨まれるので、程々だが。

「では、謁見の手順ですが……」

疲れた。何が疲れたって、ひたすら愛想を振りまいていることです。表情筋が引きつりそうだよ。実際引きつっているとと思うけど。大議会に参加する族長達との謁見自体は、数日、毎日こつこつやってるだけありそんなに多くない。多いのは、私、つまり噂の魔王のリコルを一目見ようとやってくる方々だ。平等を期するために、決められた所定の謁見外の時間帯は、誰もが私との謁見という名の見学をすることが出来る。

動物園のパンダとかライオンとか。兎に角そんな感じ。私は珍獣か！……実際その通りなので否定できない。

「私は吸血族族長の25番目の息子で……」

とまあ、こんな風にやってくるわけだ。執務中のはずのルードもなぜか残っているの、幸い皆さん挨拶だけして帰っていくの助かるが。因みにジェルさんは今日だけですよと嘆息して、行ってしまった。宰相なので忙しいのだ。政務でもない謁見に手を煩わせるわけにもいかない。それはルード。貴方もなんですけどね。

「仕事しなさいよ。……嫌、じゃない。ルードは王様でしょう。……う、それはそうだけど。でも、ルードが居なくても大丈夫だから。……過保護すぎ」

結局こうして私が折れる羽目になる。本当は誰よりも私が、ルードが毎日膨大な仕事をこなしていることは知っている。最近さぼりがちのような気もするが、ジェルさんが許すということは許容範囲内なのだろう。実際、数年引き籠もっても十分大丈夫なくらい働いているらしい。

「仕方がないなあ」

顔が緩むのは気のせいだろう。嬉しいだなんて。そんな訳がないのだから。

私の存在は貴方にとって安らぎとなっているのだろうか？

私はきつと自惚れているのだろう。

それでもいい。

いつか捨てられるまでは、どうか貴方の傍にいらさせてください。

リコル様、暴走

魔界中から集まった全部族との謁見を終えたところで大議会が始まる。数多の魔属を内包した王城内は、いつになく活気付いていた。もっともルードのプライベートルームを中心にした約1キロ圏内は閑散としたものであんまり変わらないんだけどね。うっかり粗相をしないようにと、ルードに行事で喚ばれる以外アリサは軟禁状態にあった。いや、自ら籠もったが正しい。

誰かとすれ違つ度に物珍しさが手伝つて声をかけてくる者の多いことですっかり辟易していた。それをルーデリクスに訴えたところ、ならばお前も会議に出ればいいと言われ、一度だけ参加したら悲惨なことになったになったのだ。四六時中魔王様にまわりつかれてストレスが溜まり、魔力の制御が甘くなった所へアリサの魔力に当てられた部族長らがハイになってしまい会議どころではなくなってしまうのだ。

あの時のジェルさんの怒りっぷりは凄まじかったと思い出すだけに震えが奔る。ルーデリクスは残念がつていたが、こればかりは仕方ないとアリサは反省して大人しくしていた。

のだが。（過去形）

「あーら御機嫌ようリコル様。陛下から御不興を買って、謹慎されていたようですけれどももう解かれましたの？」

「陛下も甘くていらっしやること。どんな悦ばせ方をしていっしやるのだから」

「きつとリコル様も頑張っているのよお。そうでなきゃ誰が相手にするものですかあ」

最悪だ。順番に閻族の息女エリエファ、石族の息女ロアナ、そしてマリア。出会うたびに何かとアリサに突っかかってくる三人組だった。魔王親衛隊と密かに呼んでいる。ここにザイがいればマリア以外はまだ大人しいのだが、(竜族の族長の息子なので)生憎とザイは席を外している。彼女らにとっては幸運なことに、邪魔者がいないのだ。

こういう手合いは相手にしないのが一番なので無視して通り過ぎようとしたのだが、案の定上手くいかなかった。族長の娘達だけあって、魔力は高い。気づけば足が固められており弾き返そうとしても、数日前のジェイルさんの般若顔が脳裏を過ぎって、上手くいかない。発動に失敗して、表に出た魔力が空気に拡散していく。

その様子に嘲笑を隠さず、女達はアリサを囲む。

「あら。陛下のお側に仕えているからどれ程と思えばこの程度でしたの」

「リコル様も大したこと無いのね」

「調子に乗ってるからこうなるのよお。あんたばかり特別扱いなんて許せないわ」

「こんなネックレス、貴方には不釣り合いだわ」

エリエファがアリサの首に手を伸ばし、力任せに赤い石のついた鎖へと指をかける。

「それは駄目！」

「五月蠅いですわ。身の程を知りなさい」

奪われまいと初めて抵抗するアリサをロアナが羽交い絞めにし、

マリアが白い繊手で頬を打った。かつと頭に血が上り、怒りを露わにしないよう唇をきつくかみ締める。長い黒髪がアリサの表情を隠すようにはらりとかかる。

「凶星、かしらあ。当然よねえ。だって、あんたは魔王様には全然似合わないものお。その貧相な体も顔もねえ」

怒りを抑えろ。落ち着いて。

気持ちを宥めるように深呼吸を繰り返す。今ここでやり返すことは容易い。それでも、傷つけたくはない。

「魔王様のお傍に相応しいのは、私たちなのよ。このネックレスもあなたの物ではないの」

自分が魔王に相応しいと信じて疑わない者達。真っ赤な唇がアリサの耳に毒を仕込んでいく。

魔王様が気にかけるのは一時だけ。直ぐに目を覚まされるわ。と。

そんなこと、自分が一番分かっている。それでも。今だけでも、傍に居ることを許してくれているなら私は。

「いやっ！やめて」

「嫌よ。誰が貴方の言うことなど聞くものですか」

必死に抵抗するも空しく、ぶちと音を立てて繊細な鎖はアリサの首から零れ落ちた。ぶわりと視認できるほど濃密な魔力が瞬時にアリサを包み込む。何とか留まっているが、少しでも気を抜けば溢れてしまうだろう。空気を入れた風船のようなものだ。僅かな隙間か

ら少しずつ魔力が漏れていく。

「っ逃げて…！」

抑え込まれた魔力が暴風のようにアリサの内を暴れ回る。少しでも被害を出さないように三人娘を遠ざけようと声をかけた。しかし彼女らは圧倒的な魔力を前にして一步も動けなかった。凄まじい魔力の暴力に耐えきれなかったのだろう、操り人形の糸が切れた様に蒼白な顔をして次々と倒れていく。少しでも早く遠ざけなければ死んでしまうだろう。しかし、本人ですら抑えきれない魔力が辺り一帯を覆い、それでもまだまだ滾々と湧き出る水のようにアリサという器から溢れては出て行く。

極限まで達した意識が、魔力によって呑み込まれていく。

このまま死んじゃうのかな。

意識が闇へと塗りつぶされていく中、いつになく険しい顔をしたルードの横顔が最後に見えた。

クリスマス企画という名のちょっとした日常編（前書き）

今後に繋がる一幕を書いてみました。

ラブ糖度は皆無。クリスマスすら無理やりくつつけた感が否めない
なんとも微妙な内容になってしまいましたが、それで良ければ読ん
でやってください。

クリスマス企画という名のちょっとした日常編

「そっか。今日はクリスマスなんだ」

一年という概念があまりにも希薄なこの世界ではどこまで正しいのか判らないが、少なくともアリサが数えた限りでは今日はクリスマスなのだ。

本から顔を上げた私をルードがきょとんと見返した。その間にも手は休まず動いているのだが、視線は何それ？と語っている。

「うーんと、クリスマスっていうのは神の息子かなんかが生まれた日を祝う日なの」

神の息子、と聞いてルードの目が不機嫌そうに細められる。いつになく露わな感情に、アリサは珍しいと目を瞬いた。考えてみれば神って魔王とは正反対に位置しそうだし、やっぱりお互い唾み合っているのかな？うん、そう考えればルードが不機嫌な理由も判るかも。嫌いな奴の誕生日なんて祝うはずもないし。しまった。

「とはいっても私の国は外国の祝祭日にかこつけてご馳走を食べたりプレゼントを贈ったりと、まあ神様を祝うよりも寧ろそっちがメインというか、キリストなんてぶっちゃけどうでもいいというか…」

べ、別に言い訳じゃないんだからね！

ところが、アリサの思惑とは全く別に、ルーデリクスは深く考え込んでしまった。会話？をしながらも絶えず動いていた手は止まり、

心なしか疲れているようだ。窓の外を睨みつけるようにして、溜息なんてついている。間違っても今日も長閑で良い天気だなあと考えているのではないだろう。

「えーと、なんかごめんルード。気を悪くしちゃったよね？」

あのルードにここまであからさまな態度をとられると、どうしようもなく悪いことをしてしまったかのように思える。ごめんなさいと頭を下げてみたのだが、ルードといえは不思議そうだった。どうした？って……え？それは、こっちの台詞なんですけど。

「え、いや、だって、私の失言のせいでしょ」

わたわたと意味もなく慌てる私をルードがいつもの如く膝に呼び寄せ、落ち着けとばかりに頭を軽く撫でる。

怒ってないの？

恐る恐る顔を上げれば、別に怒っているわけでもないようだ。ほつとしながらも、じゃあさっきの態度は一体何だったのだろう？と首を傾げると、再びルードが嫌そうに溜息をつく。訳が判らない。

「うーん、こういう時にジェイルさんがいたらなあ」

「呼びましたかりコル様？」

「うひゃい！！？」

ジェ、ジェイルさんたらいつの間にか？咄嗟にルードに抱きついちゃったじゃないか。あー、ご免ねルード。

「えー俺のせいじゃないですって。寧ろ俺のお陰……あはは。それはご自分でござ」

服を握り締めた際に寄ってしまった皺を直す。生地が良いのか、すんなりと元に戻った。良かった、良かった。……あれ、どうしてルードはまた不機嫌に？困惑していると、ぎゅっとハグされた。

「??????」

「暫くそのままにしてやってください、リコル様」

「はあ……??」

加減を憶えたせいとか、抱きしめられる力は強くないのでそのまま放っておく。最初の頃は骨がみしみしと悲鳴をあげるほど強かったり、触れるか触れないかくらい弱かったりと、統一感がなかったことを考えれば進歩したといえる。基本魔属の皆さんは力が強いですからね。なんせ、本体が本体なんで。ルードは生まれた時から人型らしいけど、その力は人外で、流石魔属とかやっぱり私から見れば規格外だ。要は総じて皆さん頑丈で、力も強いというわけです。そんな彼等にしてみれば、人間種なんて魔属でも最弱で（肉体的な意味で）簡単に壊してしまう存在だそう。私はルードのリコルで滅多に他の者に触られる機会なんてない。というかこの世界に来てリコル認定されてからは一度もないはず。けれど、相手は細心の注意を払っているらしい。尤も皆さん、伊達に歳をとっている訳ではないので、その辺りのコントロールはばっちりですが。

ルードの頭を今度は私が撫で撫で。ほんつとに羨ましい髪質だなあ。

「……というわけなんですよ」

「あー、成る程」

ここまでに至った経緯を簡単に話せば、苦笑が返ってきた。とい

うか、ジェイルさんまで笑顔の裏に隠せない疲労の影が見えるんですけど。

「以前俺が魔界の他に天界と人界があるって言ったの憶えてます？」

「はい」

「天王……人界では神とか言われている天界の王がいるんですけど、その人とまあ、色々あって」

一体何をしたんだ、天王とやら。色々の中に多分な意味合いが含まれているだろう事は難くない。あのジェイルさんが諦観するくらいだ。

「兎に角あんまり気にしないでください。その内リコル様にも判りますから。……はあ。憂鬱だ」

「げ、元気出してくださいね、ジェイルさん」

「ありがとうございます」

とぼとぼと哀愁漂う背中が扉の向こうに消えていく。本当に何をしに来たんだろう、ジェイルさん。ルードに用事とかあったのではないだろうか？まさかわざわざ説明するために？……それこそまさかね。

アリサの元に天王からの招待状が来るのはもう少し後のこと。

クリスマス企画という名のちょっとした日常編（後書き）

本編は明日の更新予定となっています。

リコル様、奪われる!?

やっぱり怒ってるよねー。

目蓋を開けば一番に映ったルーデリクスに、即座に顔を背けたくなったアリサだが、顎を捕らえられているために適わない。視線だけで人を射殺せそうな雰囲気だ。かといって逸らす事も出来ず、深い闇を宿した瞳をじっと見つめる。

どれだけ見つめ合ったのか、先に逸らしたのはルーデリクスだった。あからさまに溜め息をつくときアリサを顔を自分の胸に押しつける。さすがに悪かったかなと思ったので最初は甘んじていたのだが、力が強くなるにつれ息苦しくなってくる。

「りゅ、りゅーろ、くるひい!」

降参とばかりにはしばしばルーデリクスの背中を叩くのだが、一向に力は弱まらない。ちょ、窒息するってば!

本格的な生命の危険に暴れるアリサを、ようやくルーデリクスが放してくれた。

どうした?

やや不満そうなるルーデリクスから脱出しながら、アリサは肩で呼吸する。すーはーすーはー。あゝ生き返るうゝ。

「あのね、息が出来なくて危うくあの世に行くところだったの。ハグするのは構わないけど、ルードの馬鹿力は考えてからやって」

あのべらぼうに重たい扉をいとも簡単に開ける豪腕の持ち主なのだから。

そついうものか？

そついうものです。

恐る恐るといった感じで、今度は優しく引き寄せるルーデリクス。穏やかな抱擁は、アリサの心を落ち着けてくれる。目覚めたあとの生命危機ですつかり忘れていたが、ぼんやりと意識を失う前を思い出し、身体が震えてくる。

もしあの時ルードが助けられなければ、周囲を巻き込んで死ぬところだった。今はルードが傍で抑えてってくれるけれど、制御できない自分の力が怖い。今更ながらに身体が震えてくる。

「大丈夫」

珍しくルーデリクスが声を発した。恐怖に怯えるアリサにルーデリクスがそつと唇を合わせる。感情の高まりで再び内側で暴れかけていた魔力が、ルーデリクスから吹き込まれた魔力によって抑えられるのが判った。最後に下唇を啄んで綺麗な顔が離れていく。

………………。あれ？いまキスしなかった？

軽く触れ合わせるだけのもの。あまりに自然すぎて、なんのリアクションもしなかった（出来なかった）けど、もしかしてファーストキスを奪われた！？

えーと、因みにこの場合は。

- 1・乙女の唇を奪った粗忽者に鉄拳制裁
- 2・何事もなかったようにスルー
- 3・逃亡

さあ、君ならどうする？

ちっちっちっちっ。ちーん。

1 後3を選択したアリサ。早速行動に移るであります隊長！

ひとまず手を振り上げて。……………やめた。不意打ちではあったけど、全部アリサのためだったし、裸の付き合いをしておいて今更キスで騒ぎ立てるのも面倒くさい（ここ重要！）。何より、本気でルードが心配して、そして安心するように慰めてくれてるのが判ったから。自分だけ意識しているのもアホらしい。

奇怪なアリサの行動に不思議そうにしていたルーデリクスだったが、何やら考え出したアリサをベッドに引きこむ。腕の中に抱き寄せれば抵抗無く、すっぽりと収まる。甘いアリサの香りを吸い込んで、ほっと安堵の息を吐いた。アリサはちゃんとここにいます。

その後、暫くして快復した衛兵達から女達の証言を聞き、ルーデリクスは純粹な怒りを憶えた。自らもそのような感情があったのかと驚いたくらいだ。証拠がないだけに処罰する事も出来ず、ひとまず各族長達に預けてある。問題はアリサだ。ルーデリクスの魔力を入れたせいかな、今は落ち着いているようだが、制御装置がなければ

不安定なアリサを一人置いていくことは難しい。出会った当初に比べ、魔力を意識するようになったせいも格段に魔力量が跳ね上がっている。その意味でも不用意に一人にするのは危険だった。会議に出席する事を嫌がっているようだが、この際仕方がない。

「アリサ」

「ん？何」

「（会議中）傍にいる」

ぼんつと顔が赤くなるアリサ。いきなりプロポーズ？とか面と向かって言われると恥ずかしい等々呟いていたアリサを放って、ルーデリクスは眠った。

くっくつと笑うジェルさんにぶくつとアリサは頬を膨らませた。

「だって普通その流れでいったら、プロポーズだと思っじゃないですか！ルーデだからあり得ないって判つてても。詳しく聞こうとしたら本人は寝てるし」

「いやあ。仲がよろしくて大変結構ですよ。陛下の焦る様子も見る事が出来ましたし、近いうちに目出度いことも起きそうだ」

「だからなんでそうなるの？」

「愛されてる証拠じゃないですか。魔力の遣り取りをするのは、非常に危険な事ですしそれが口移しともなれば、ねえ」

力が全ての魔界では、力、つまり魔力を遣り取りするのは本当に信頼の出来る相手にしかやらないらしい。それは相手の魔力に干渉するのと同じで、下手すれば相手に魔力を奪われる可能性だってあるのだから。

「……なんですか？」

意味深なジエイルの言葉に思わず身構える。訊かなきゃ良かった。後悔後に立たずってというのはこういうことか。

口移しは独占の証。相手を喰らうことで一つになる　　つま
り身も心も一つになりたいっていう強い独占欲の現れなんだよ。

リコル様、会議に出席する（前書き）

いつもながらにぐだぐだです。では、どうぞ。

リコル様、会議に出席する

会議に参加するのは二回目だが、常にルードが制御装置の役目を果たしてくれるために前回のような阿鼻叫喚図にならなかったのは良かった。けれど前回とは違い、今回はかなり精神的に疲弊させられた。ルードは相変わらずほとんど口を開かないから、必然的にジエイルさんが代弁することになる。

問題はかなりどうでも良いことまで全て訳してしまうことだ。しかも正確に。つまり私とルードの無言の遣り取りとかも余すことなく伝えるわけ。私がお腹減ったなと顔を上げれば、何か食べるかと返ってくるわけだ。それをジエイルさんが生真面目に訳すもんだから、周囲からはちらほら笑いが漏れるわ、丁度良い時間ですし、一旦休憩してお昼にしましょうかと気を遣われる始末。人生でも上位に位置するだろう羞恥を味わわせていただきましたとも。

今日一日でこの多大なる精神被害を考えれば、明日、明後日は一体どうなるのやら。もういつそ、寝てしまおうか。人前で寝顔を晒すのも恥ずかしいが、憤死しそうな羞恥を味わうよりもましだ。

翌日。早速実践してみたのだが。

「和むなあ」

「和みますね」

「可愛いなあ」

魔王の腕に収まって眠る少女（大半の魔属から見れば少女になる）に、自己主張の嵐で紛糾していた会議が穏やかに進む。出席者の内心とは逆に、ルーデリクスの胸の内はブリザードが吹き荒れていた

のだが、面に表さないためにジェル以外気づかない。

「あー、陛下落ち着いてください。ほら、リコル様が起きちゃいますよ」

丁度身じろぎしたアリサに、ルーデリクスは慌てて抱え直す。そのまま続く寝息に肩の力を抜くと、自らが手入れを施している豊かな黒髪を指で梳く。その様子を欠席者は微笑ましく見守っていたか。（ジェル談）

「今日の会議は実に有意義でした。この調子で明日もお願いしますよ」

すっかり日が暮れた頃、欠伸を噛み締めていると、ジェルさんが今日の様子を聞かせてくれた。いつも以上に笑顔の彫りが深い。対照的にルードは不機嫌なようだが。今も休めず手を動かしているが、三人だけだからなのか、魔力を隠すことなく洩らしている。

「そういうことで、後は頼みます。適当なところで仕事を終わらせてくださいね」

額にびっしり汗を浮かべたジェルさんは、布で汗を拭いつつ去っていった。どうやらジェルさんですらきつい魔力を放っているようだ。生憎と鈍いアリサには感じられないが。

「……ルード。今は城に沢山滞在してるんだから自重。……うん？この部屋だけ。って、随分と器用なこと」

ただ単にジェルさんを追い出したかっただけのようだ。ついでに人払いも込めているのだろうか？全てを呑みこまれる感覚は誰でも嫌だろう。

「それで？何で怒ってるの」

書きかけの書類を取り上げる。奪われる前にルードの手が届かない場所へ遠ざけた。ルードは嘆息するとペンを置いた。やっと仕事を終えるのかと感心していると、手の中から書類の感触が消えた。いつの間にか、ルードの手に戻っている。

「あつ！むう。また気づかなかった」

魔力の動きを読むのも大事なこと。魔術を発動する際、物語に出てくるような呪文とか詠唱なんてものはないのだ。その代わりに魔力の動きを察知して先手を打つ。それが魔術戦の基本である。アリスは自身の制御に手一杯で、魔術を一つ発動させるのすら困難だ。特に魔力探知は苦手で、そのせいでルードの強制転移なども逃れられないのがいい例だ。

要練習とばかりに頭を軽く叩かれて、次には見慣れた居室へ。魔術の発動があまりにも自然すぎて、悔しいとすら思わない。魔術を手足の如く自由に使えて初めて一人前と見なされるのだ。サハンとシエナに魔属式の戦い方を一度だけ見せて貰ったことがあるが、ぶっちゃけ何をしているのかほとんど理解できなかった。私はどうも視覚に頼りすぎているらしいが感覚に頼れと言われても、やはりそれまでの生活からどうしても目で追ってしまう。結局はそれが魔術を学ぶ上で邪魔になっていると最近漸く判ってきたところだ。

今の目標は、ザイ（護衛）無しで歩けるようになること。私に喧

嘩を売ってくる輩はほとんどいないのだが、それでも完璧にはい
かないからザイが居る。日頃ぐーたらしてるように見えるけど（実
際しているが）、ちゃんと練習はしているのだ。偉いだろう。ふふ
ん。

誰にともなく胸を張っていると、偉い偉いってルードが頭を撫で
てくれた。何だろう。滅多に褒められた経験がないからだろうか、
こうして頭を撫でられるのは好きだ。認められているようで嬉しい。
きっと今の私が犬だったら尻尾をぶんぶん振ってるんだらうなあ。

ふにやつと顔を緩ませているアリサを見ると、これまで感じ
ていた苛立ちが氷解していく。アリサがこんな姿を見せるのはルー
デリクスの前だけだ。本当は誰の目にも触れさせないように閉じこ
めて、ずっと傍に置いておきたい。寝顔という無防備な姿を他者に
見せるなど言語道断であったし、勿論明日の会議は絶対に寝かせな
いつもりだ。

アリサは私のものだ。

三日月を真似るように口元が弧を描く。それは普段のルーデリク
スが見せることのない、嘘偽り無い本心。

人はそれを独占欲と呼ぶ。

リコル様、解説する(前書き)

短めです。

リコル様、解説する

むづ。

現在の私は、一枚の紙と睨めっこ中。どこのハンゲル語って感じの文字の羅列が所狭しと並んでいる。久しぶりに目にしたそれは、脳内をパンクさせるには十分だった。

「うづ……。だってちゃんと勉強してたもん。嘘じゃないからね」と誰にもなく言い訳してみる。ああ、なんて悲しいんだろう。

事の発端は、長椅子でぐーたらしてたアリサの上に現れた一枚の紙面だった。見覚えのない筆跡がこれでもかという具合に並んでいる。形が崩されている上に意味が判らない。

「えーと、これが会う……。青猫の間……。緑月昇る頃……。めいに？」

アリサの乏しい知識ではこれを拾うだけで精一杯だ。後は習ったこともない不可思議な文字が並んでおり、恐らく崩されているのだろうと納得。元教師であるシェナや日頃目にする機会の多いルードの書類なんかの文字は綺麗に整っているので読めるのだが、流石にここまで崩されると、アリサの能力では不可能だ。喻えるなら日本人小学生が悪筆な筆記体を読むようなもの。

「ルードの文字じゃないよね」

そもそも彼がアリサに手紙を書くことはない。そんな手間をかけるなら直接呼び出し、もとい強制転移させた方が早い。では一体誰

が犯人なのか。

アリサが寝ていたのは会議室近くの控え室。勿論ルードが誰も近づかないようにと結界を張っているはず。そのルードが気づかなかった？

アリサの魔力に紛れて気づかなかったのだが、それを本人が知るはずもない。

とりあえず辞書を持ってこよう。そう思い、アリサは部屋を抜け出して、自室へ駆け出した。

アリサ？

会議は紛糾しており、僅かに困惑を滲ませたルーデリクスに気づく者は居なかった。このまま呼ぶのもやぶかさではないが、先日の一件を思い出せばアリサをこの場に呼び出すのも躊躇われる。さてどうするべきか。

ルーデリクスの思案する仕草に現状議題に上っている下位魔属の食糧問題については本当に深刻問題のようだと列席者がこぞって思ったのは仕方ないだろう。

そんなルードの気も知らず、アリサは勉強部屋につくと早速本棚から辞典を取り出した。広辞苑も真つ青な分厚い辞典は運ぶだけでも一苦勞である。加えて日本のような製紙技術が整っているわけで

はなく一枚一枚が大雑把で、なんとドラゴンの皮で作られているらしい。流石魔王城の辞書と感嘆したのは懐かしい。

この辞書実は、アリサのような異世界から召喚された花嫁用で何年経っても朽ち果てないという由緒正しいものなのだ。だからドラゴンの皮。普段ルード達が使っているのは人間界から取り寄せているものだとか。他にもドラゴンのパーツは様々なところに使われている。将来的にサハンも死んだら道具にされるのかと聞いたら、恐ろしいものでも見るような目をしていた。なぜ？

サハン曰く。竜族は竜族でドラゴンはドラゴンだそうぞ。同じじゃないの？と聞けば、もの凄い剣幕で小一時間ほど膝を詰めて丁寧に説明された。余程嫌だったらしい。

「ドラゴンは俺らと似たような姿してるけど、全く別物。ここ重要な！あんな知性のかけらもない下等生物と一緒にすんなよ。俺達、竜族のことをドラゴンって呼ぶのは蔑称だから気をつけるよ」「はい」

てな遣り取りがあつたんです。つまりドラゴンって奴は下位魔属で、使役される側らしい。上位魔属から見たら家畜と一緒に。豚野郎と言われたらそれはまあ、怒るのは当然だ。ちゃんと謝ったら許してくれた。そこから派生して、多民族のNGワードなんかを教わったりして、その日の訓練は結局潰れてしまったこともありました。

巻末の文字表と見比べてみたけれど、どう考えても先程アリサが口にした以上の内容は読み取れない。ふとカーテンを揺らす窓を見てみれば、蒼い月が沈むところだった。次は緑の月が昇る。つまり紙に書かれている約束の時間。

「どっしりよっし」

ルードからは会議が終わるまで入室禁止を言い渡されており、ルードは勿論ジエイルやサハン達は会議に出席しているので相談出来ない。このまま放置することも可能なのだが、退屈していたアリサは少しばかり興味を憶えた。虎の威を借る何とやらではないが、アリサに危害を加えるような輩はいないだろうと楽観的に考えていたのだ。アリサは辞書の間の手紙を挟むと衛兵達に場所を聞きながら向かった。

リコル様、誘拐される

……サ。ど……い……？

ルード？

雑音が混じってよく聞き取れない。ただ切羽詰まったような感じが彼らしくなくて、へんなのーと思った。それよりも何だか寒い。手足を丸めてどうにかして布に収まろうと四苦八苦しただけ、明らかに布面積が足りないことに気づく。

暴露してしまうと私の寝相は吃驚するほど酷い。夏には就寝前と180度景色が違いましたなんてのは当たり前。一番被害を被っているだろうルードは元気だなんて頭を撫でてくれたけど。あー、なんか違うような……。

兎に角それだけ寝相が悪いので、布団がベッドから落ちているなんて事も日常茶飯事だ。今もきつと床に落ちているのだろうと、ベッドの下に手を伸ばしてまさぐるのだが。

……ない。

えーなんでー？見ればいいじゃんとか言わないでくださいね。布団を掛け直すのに目を開ける人なんて居るわけが無いじゃないか。これから更に寝ようとしているなら尚のこと。あーくそ。ルード早く来ないかなあ。

背中の後ろを探ればひんやりとしたシーツの感触が返ってくる。そして更に手を伸ばせば、体温すら奪うような固いものが。そう、

これはまるでコンクリートのような触感。

コンクリート？あれ、確か魔界にコンクリートなんてあったっけ？とずれた感想を抱く。そんな何処かのボロアパートじゃあるまいし……。ベッドもこんなに小さかったかな？確か四畳くらいの広さを誇っていたと記憶してたけど。流石魔王なだけあってベッドもキングサイズなのねーと妙に感慨深く思ったものだ。

……………おかしくね？

接着剤でもつけたような臉を無理矢理引っぺがし、何とか起き上がることに成功したアリサは、眠り眼を擦りながら部屋を見回す。腹辺りを隠していた毛布の切れ端を広げてみて、こりゃ寒いはずだと納得した。というか。

「……どっ？」

ぶつちやけ今更な気もするが、寝起きが最悪の状態で、瞬時に頭を働かせるといのが無茶である。

丁度魔王城のトイレ部屋と同じくらいのサイズで、家具らしいのはアリサが寝かされていた粗末なベッドくらいだった。春先とはいえ夜は冷え込むのに、この所行はいくら何でも非道すぎる。こんなぺんぺん毛布一枚でお腹冷やしたらどうしてくれるんだ！

窓もないので大まかな時間は判らないが、腹の空き具合から確実に昼食の時間は過ぎているだろう。

「あー、えーと。整理しよう。まずどうしてここにいるんだっけ？」

寝起きで鈍い頭を一生懸命回転させるが、残念なことに思い当たる節が一つしかない。そう。ルードに捨てられたと。……なんだか泣きたくなってきた。

「確かに私って可愛げ無いし、胸無いし。顔は中の上くらいだと自負してたけど、ルードから見れば下もいいところだもんなあ」

あの美形集団と一緒にしないでください。

「最近相手にしてくれなかったのも飽きられちゃったからなのかな、やっぱり。……はあ」

「人の顔を見るなり溜息つかれると傷つくんですけど」

「私って魔力の探知も下手くそだしね。どうせ満足に魔術も扱えないもん」

「おい、俺のこと無視すんなよ」

「ルードの人でなしとか思ったもんね。ああ、人じゃないから魔王なし？そっぴや、ルードってどんな種族なんだろう」

「お兄さんいい加減へこたれそうなんだけど」

「態とだもん。……あーあ、次に会ったら謝らないとなあ」

「ちゃんと聞いてんじゃねーか、おい」

「誘拐するならもう少しマシな毛布にしないよ。寒いでしょうが」
「それは悪かったな、ってまず一番に言うことがそれなわけ？」

無視するのも飽きたので、アリサは漸く落としていた視線を上げた。薄桃色の髪に服の上からでも判るしなやかな肉体。美形を見慣れているせい、目の前の青年は確かに美しいのだがいまいちぴんとこない。

「当然。お陰で目が覚めたじゃない」

「あー、お姫さんよく寝てたもんね」

「私の寝顔は高いんだからね！」
「……あんたの相手は疲れたよ」

こう、触手が動かないというか。

「私は別に痴女じゃありません」

「？俺痴女も好きだぜ」

「変」

決して青年に向けたわけではないのだが、そうとは受け取らなかつた青年はがくりと膝を折った。ここにスポットライトがあつたら独白でも始まりそつだ。

なんてことを考えつつ、漸くアリサは状況を冷静に見ることが出来た。誘拐。否定しなかつたことから本当のことらしい。

これがホームドラマでお約束的展開の誘拐ですか。そうですね。王道は身代金、もしくは人質の解放など誘拐された人物の近い者に要求する為に行われる犯行が多い。この場合、魔王に対する要求 or 反乱の線が一番濃い。

だが、おかしい。魔属は総じて誇り高くそして潔い。良くも悪くも正々堂々が基本で、強い者に従う精神が骨の髄まで染みこんでいる。自分の意見を通したければ力を示すのが常識だ。だからこういうやり方は、彼等からすれば”下劣な行い”とされ、軽蔑に値する行為として忌避されている。そういう価値観が、人間を嫌う一端でもあるのだろつ。

脱線してしまつたが、今回の犯人は魔属でも新参の、しかも人間である可能性が高い。目の前の男を従わせる位だ、それなりの力は

有しているのだろうか、実に愚かな振る舞いといしか言いようがない。

「さて、と。遊びはこのくらいにしておくか」

「残念。もう少し遊びたかったのに」

「気が強い女は好きだぜ？抵抗するほど締めりもいいし、そういう奴に限って最後は自分からケツを振りまくるんだ。想像するだけでぞくぞくする。そういう女のは美味いんだよ」

「うわー、変態思考」

「男の浪漫だつっの。どうせ、あんただって魔王様の前ではよがりまくってたんだろ。どうだ？魔王様のあれってやっぱり」

「あなた、淫族？」

顎を掴む腕を振りほどきながら、アリサは確信していた。ささやかな抵抗に、青年は怒るところかその美貌に愉悦を浮かべる。

「俺はカロンズース。今夜は極上のディナーになりそうだ」

それまでは片鱗も見せなかった欲望の色を見て、アリサは背筋が震えるのを感じた。

リコル様、誘拐される(後書き)

続きはまた近いうちに上げたいと思います

リコル様、まな板の上の鯉（前書き）

下品表現入ります。ご注意ください。

リコル様、まな板の上の鯉

なぜあの女の元に？

ルーデリクスが怪訝にするのも無理はなかった。移動先が勉強部屋だったと安心したのも束の間、アリサが客室の方へと向かっていくのだ。それだけならまだしも、アリサの行く先は淫族に宛われた客室。会議場を見回せばルーデリクスからほど近い所で族長のバースが座り、その後ろにシエナも控えている。

流石、元花嫁候補といったところか。アリサほどではないが、強大な魔力は淫族の部屋に留まっている。これが先日アリサが暴走しかけた原因のと考えたところで、弁論が止まっていることに気づいた。

脂汗を掻きながらこちらを見るジェイルに、どうやら魔力が漏れ出たらしいと嘆息。瞬く間に充満していた濃密な魔力が霧散し、一同は安堵を浮かべていた。

「一体どうしたんですか、陛下？」

再開されたのを確認し、頃合いを見計らってジェイルが話しかける。

アリサが脱走した。

「脱走！？……いえ続けてください」

出席者の咎めるような視線を受け、ジェイルは慌てて声音を抑え

た。

隣室から消えた。

「え？あ……本当ですね」

ルーデリクスの魔力に覆われているため、魔王城で気配を探るのは難しいのだが、傍にいた機会が多いことと、この場合ルーデリクスが一時でも抑えてくれた為、辛うじて探知を可能にしている。

「これは精猫の間。淫族の客室じゃないですか」

行ってくる。

「待つてくたさい！今貴方に行かれるのは困ります」

転移しようとするルーデリクスの腕を慌ててジェイルが掴んだ。

抗議の視線を受けるが、ジェイルは頑として譲らなかつた。

「ただでさえ遅れているのです。これ以上伸ばすのは、各領地にも影響があります」

主やその一族不在の今、留守中の各領地では下位魔属の動きが活発になる。ヒエラルキーの底辺に位置する彼等は数も一番多く、それを統率するには上位魔属ほどの力でなければ不可能だ。会議が延びるほど、抑圧の効果は薄まっていく。そうなれば数に明かせた暴力によって、深刻な被害を受けるだろう。

そんなもの、と思ったが、衛兵に連れ戻させますからというジェイルの言葉に渋々ルーデリクスは引き下がった。

数時間後、元花嫁候補の愚かさを甘く見ていたジェイルは頭を抱えることになる。

アリサの現状を一言で表せば、絶体絶命に尽きる。カロンスースの言葉に薄々そうかなーとは思ったけれど、これは恥ずかしい。というか、何の羞恥プレイでしょうか。

「気を失いたい」

今ほど切実に願ったことはない。高校の部活で過呼吸になるほど頑張つて走る友人に、羨望を持ったことはあったが、それ以上だった。だが悲しいかな、こんな事態に陥っているにも拘わらず、頭はクリーンなほどすっきりしていた。

「ま、その内離れなくしてやるよ。ほんっと、あなたの魔力はそそられる」

ちろりと赤い舌が唇を舐める。なまじ顔が良い為、ちょっとした仕草で色気も倍増なのだがどうもいかん。やっぱり目が肥えすぎたのだろうか、妙に落ち込んでしまった。

「ねー、私お腹減ったんだけど」

「俺もだ」

「……体力持つかな？」

「心配しなくても一発やれば、天界に連れてってやるよ。安心しろ」
「いや、貴方の技術を疑うわけじゃ……って何言わせるの！」

もしかして毒されてる？にやにやしているカロンズースの頬を張り手したかったが、かちゃりと鳴る金属がそれを阻む。今のアリサの状態はまさにまな板の鯉。いや、鯉よりも酷いかも。

部屋の内装は先程とは一変してどこの一流ホテルですかと問いたくなるような程豪華で（ここ重要）、部屋の中心にでかでか置かれたベッドはルードのベッドよりも更に大きいサイズ。真っ白なシートには甘ったるい香りが染みこみ、思考を奪っていくような錯覚に陥る。壁には鞭とか長い棒のようなものとか、一体何に使うのか疑問に思うようなものが多数かけられているが、流石にここで聞く勇氣はなかった。

なるべく視界を上固定しながら（上からぶら下がる赤い紐は何だろう？）、どうにか抜け出そうと藻掻くがシーツの皺が寄っただけだった。

「無駄だ。お姫さん程度の魔力じゃ破れねーよ」

程度つて失礼な。これでも、ジェイルさん曰く相当高いらしいのだが。

「魔王様もなんであんなみたいな弱い奴を選んだんだろうな。俺達のマ……おっと、危ねえ」

「態とらしすぎる。っていうか、ここに来る前に本人と会ってるし」

嫌なことを思い出してしまった。四肢を繋いだ鎖から逃れるのを諦めて、アリサはベッドに身を任せた。これから始まるのは食事という名の饗宴と聞かされている。餌はアリサ。別に操立てているわけではないが、初めてがこれかと思うと泣けてくる。喜ばせるだけだから泣かないけど。

きつと、首謀者は今も安全なところから見ているのだろう。哀れに震え上がって泣くのを期待していると思えば、溜飲が下がる。そんな可愛らしい女だったら、魔界に来た途端逃げ出していた。

「んじゃ、これからすることも判ってるよな」
「食事でしょ？」

カロンスズースの口角が上がる。一拍遅れてアリサも気づいた。

「準備が整った。んじゃ、まあディナーを始めましょうかね」

メインディッシュは極上なる魔王のリコル。

リコル様、襲われる（前書き）

若干暴力表現とちょっと不味いかも？な性的表現が入ります。嫌いな方や15歳未満の方は申し訳ありませんが、スキップしてください。よろしくお願いいたします。

リコル様、襲われる

天変地異が起こったのは、第六代魔王が就任して以来、初めてのことであった。魔王城を中心にして魔界全土を覆い尽くした黒い魔力は、魔属達を震撼させ、白目を剥いて倒れる者が全体の9・9割を超える。魔王城でも上位の族長のみが辛うじて意識を繋ぎ止めていた。玉座の主が一步進むたびに世界は揺れ、空が割れていく。普段は鏡のような黒い双眸は怒りに染まり、狂気が宿っている。

これこそが魔王の真の姿。それを阻む者は誰もいなかった。

鼻腔を擦る男達から香る甘い匂いも、猥雑な言葉の数々も、今のアリサにはただ気持ち悪いとしか感じられない。口内を舐る舌を思いきり噛めば、つんと尖った先を捻られる。僅かな部分を残して引き裂かれたドレスの中を複数の手が這い回り、媚薬を含んだ分泌物が、脳の指令を狂わせていく。徐々に早まっていく獣じみた息遣い、態と立てられる卑猥な水音。いつそ狂ってしまったえば楽なのに、高すぎる矜持が許さない。

「へえ。天下のリコル様がまさかまだなんてな」

足の付け根の部分をまさぐっていた男の一人が、歓声を上げる。その他の部位を髑ついていた男達は一旦動かす手を止めると、まじまじとそこを見た。自分ですら見たことのないそこへの視線が居たたまれない。穴があつたら100年は冬眠していたい。

益々行為はエスカレートしていき、嫌が応にも逃げられない高み

へと強引に上り詰められる。

モウイヤダ。コワイ。ダレカ……。

大粒の涙がとうとうぼろりと零れた時、部屋に轟音が響き渡った。

思う存分魔力を解放出来た事への高揚感と、沸騰するような怒りが交ぜになって体中を巡る。慣れた仕草で辿り着いた部屋には、蒼白になって震える女が地面で這い蹲っていた。

ああ、この女が私のアリサを。

なまじ美しいだけに、微笑めば一層凄みを増す。マリアは本能で悟った。起こしてはならない獅子を起こしてしまったと。

「私のものを返せ」

透き通るような低い声が耳に届く。怒りの中に隠された悲哀にマリアが気づくことはない。ただ従うことが精一杯で、マリアは床に転がる拳大ほどの水晶球を指差した。それを拾ったルーデリクスは映っている光景に、勢いのまま水晶球を握り潰し、細かな破片が地面に降り注ぐ。

「ジェイル」

「ここに」

虚空に突如として現れた緑髪の青年は、伶俐な眼差しを受け止め、御意と答える。それを見届けて姿を消した主に小さく溜息をついた。

少しは緩和されたプレッシャーから立ち上がるうとしたマリアを踏みつけ、剣で両手を地面に縫いつける。醜い悲鳴が上がり、ジェイルは不愉快そうに眉を寄せた。

「黙れ、女。我らが主のものに手を出した罪は重い」

まるで岩に押しつぶされるような重圧に耐えきれず、マリアは口から血を吐いた。ひゅーひゅーと苦しそうな呼吸が混じる。憎しみの籠もる視線を受けながらも、ジェイルはただ主の帰還を待ち続けた。

湧き上がるのは衝動的な殺戮。マリアと違って手加減はしない。

眠りから醒めたような男達一人一人を囲むように黒い球体が包み、

「消えろ」

その一言で悲鳴を上げることすら許されず、人とは思えないほどに凝縮された風船のようなものが弾け、白の世界を真っ赤に染めた。滑らかな白い肌に無数の鬱血の跡が散り、潤んだ瞳は焦点を結ぶことがない。

「アリサ」

この世で尤も短い呪を唱えてもこちらに気づくことがない様に、後悔が押し寄せる。ルードは魔力で作られた鎖を一握りで壊すとマントで裸体を隠し、その場を後にした。

「やあつ……怖いよお……」

身体を這いずる手が、恐怖を呼び起こす。いやいやと首を横に振ってみても、押さえつけられた腕は外れず、悲鳴は男の口の中に消えていく。怖いよ。ダレカタステテ。

淫族によって強引に高められた身体は、直ぐに火照りを思い出す。男達からかけられる言葉が蘇り、ぐっと唇を噛んだ。鉄の味が広がる。男は何かを言つて、傷口を舐めた。ぴりつとした痛みを生ぬるいものが口腔を犯す。

アリサの身体を隠していた一枚の布きれはあっさり剥ぎ取られ、裸体が晒し出された。体内に異物が入り込むのを耐えきれず、半狂乱になって暴れる。

「やだっ！助けて……誰か……助けて……」

啜り泣く私に、驚いたのか拘束されていた腕が僅かに緩んだ。我慢していた涙がこぼれ落ち、後から流れていく。

「助けてよ……ルードお……」

脳裏に浮かぶのは、寡黙な魔王の姿。いつだって優しく受け止めてくれた腕の中に帰りたいたい。

「アリサ。こっちを見る」

顎を強い力で向かされる。せめてもの反抗と、目蓋をぎゅっと閉じた。男の息遣いが唇に当たる。また奪われるのか。気持ち悪い行為をさせてなるものかと、口を閉じた。

しかし身構えたはいいが、一向にその気配は見えずただ黙って見ているようだった。これまでの強引さが嘘のようで、強い力で抱きしめられる。僅かに香る体臭に憶えがあって、ゆるゆると目を開けた。

心配そうな漆黒の瞳が見下ろしている。ここは安全だと強ばっていた力を抜いて、胸元に顔を寄せた。そうすればいつものように伸びた長い髪を手で梳いてくれる。この手は大丈夫。

暫くされるがままに大人しくしていたが、顔を寄せたそれが直接肌に触れていることに気づく。

ど、どういうことですか!?

そーいえば、足元に何か固いものが当たってるような。怖くて見えないけど。無駄にそういう知識だけはあったので、まさかという思いともしかしてというのが半々でまともにルードの顔が見えない。葛藤していると、ルードの空気が変わったのが判る。髪を梳いていたはずの手は、その、脇腹とかお尻とかどう考えても不埒な方に動いてるよね??

って、ルード相手になんで欲情しちゃってるの、私。これくらいのスキンシップは毎日されてるはずでしょーが。心頭滅却、落ち着け、落ち着くんた。

「アリサ」

低い、腰にくる声が私の名前を呼ぶ。見ちゃいけないって判っていても、この声に抗えない。見れば囚われるだけなのに。

黒い双眸が交わる。穏やかな知性を感じさせる、言葉よりも雄弁

に語る瞳が、今まで見たことのない色をしていた。剥き出しの獣のような。どうして今までこの人の胸の中を安全だと思っていたのだろう。一番危険なのは魔王だったのに。

「アリサ。我慢できない」

何が？とか惚けたら最後、そのまま流される気がする。返事を待っているのは、一応私の意志を尊重してくれるのだろうか？

こっちの方が恥ずかしいんですけど。

大体私はこっち方面は初めての体験で、そのディープキスとかも初めてだったし。いきなりこれはちょっとハードルが高いと思います。私の貧相な身体に誰かが発情するとも思えなかったしね。hahaha.....

あほくさ。

本当なら、こういう行為は大好きな人とするもんだろう。恋人とかね。私とルードの関係ってそんな甘いものじゃない。ただの主人とペット。客と品物ですらない、危うい関係。飽きられたら一方的に切り捨てられる。それをいつちやあ恋人同士も同じかもしれないけどなあ。

やっぱり初めてって良くも悪くも一生に一度の大切な思い出なんだよね。女として洩れてるとは思うけど、一応女だし、夢くらい見るさ。こんな愚かな判断は間違っているのだろう。もっと身体を大切にしないとかお母さんに怒られそうだ。でもね、まあいっか、とか思っちゃうんだよねえ。将来の約束だって、束縛ですらくないこの人に。

好きか嫌いかで問われたら間違いなく好き。でもそれは、恋じゃあない。セフレとかいう、対等な者同士ですらない。だって私ペッ

トだもん。体のいい精力処理とか？その割にはこの三年、よく我慢できたなあと褒めてやりたい。男の人ってどうしようもない性的欲求があるみたいだし。あ、でも魔属だから違うのかな。……どっちでもいいか。

私が恐れているのはこれ以上ルードに依存したくないこと。一度身体を繋げてしまえば、どんなに薄情な私でも、あっさりさようなら出来る自信がない。こういう時、下っ端は不便。いつ、タイムリミットがくるのか。見えない时限爆弾を抱えて、それでも私は耐えられるの？

あー、うじうじと鬱陶しい。こんなん、したいかしたくないか、でしょ。難しいこと考えたって現実は変わらない。だったら答えは

「いいよ」

ルードだから、私の身体を好きにしても。これだけ私を弄ぶなんてさすが魔王様。恐ろしい人？だわ。

その後はよく憶えてない。ただ、もの凄く痛くて、最後は気持ち良かったとだけ言っておこう。

リコル様、襲われる（後書き）

これくらいならR15でもおけーかな、と思いましたが、やっぱり不味いんじゃない？と思われる方。指摘してやってください。

リコル様、狂愛

「おや、おめでとございます。陛下。……ええ、楽しみですねえ」

憤死しても良いでショウカ？例によつていつもの如く膝上抱っこされてる私ですが。そして、真面目に政務に励んでいるルードですが。ルードの執務室に人が入ってくる度、嬉しそうにおめでとございますとか言うの、やめてほしいんですけど！？というか、なぜこんなにプライベートが筒抜けなわけ？

「え？そりゃ、魔力を見れば一発ですよ。リコル様の魔力は陛下の魔力が良い感じに混ざり込んでますし、陛下も同様ですし。それに何より、陛下の機嫌がすこぶるいいですからね」

「……ええー」

「因みに精気が一番魔力の交換率がいいんですよ。こればかりは相性ですからね。お二人はなかなか良いようで」

魔力に差がありすぎる個体が繋がると、相手の魔力に負けてそのまま魔力に呑みこまれることもあるそうなの。

というか交尾ですか、ジェイルさん。

「陛下もその気になってくださって良かったです。この調子ならお二人の子供は期待できそうだし」

「子供ってちょっと飛躍しすぎじゃ……しかも期待？」

何の？

目を点にする私に、ジェイルさんは嫌だなあ、呆けないでくださ

いよ、ときた。さっぱり訳が判らん。首を傾げていると、ルードが私の毛を引っぱって視線を外へ。おっと、もうこんな時間か。今日はケルちゃんの子供たちと遊ぶ約束をしているのだ。元気な三つ子ちゃんでもっとも可愛い。そのスピードは流石魔獣とあって、普通に走れば到底追いつけるものではない。つまり魔術を使うことになるわけで練習にもなる。

「じゃ、行ってくるね」

膝を降りようとした私に軽くルードが唇を触れ合わせる。人前はかなり恥ずかしい。が、気をつけてという言葉で送り出してくれたルードに一々鼓動が跳ねる。恐らく茹で蛸になっているのだろう、ジェイルさんへの挨拶もそこに私は足早に厩舎へ向かった。

二人の初々しい様子に頬が緩んでしまうのは仕方がないだろう。

孫でも見るような気持ちでつい微笑ましくなってしまう。

「陛下の気持ちが決まってくれたようで正直俺はほっとしましたよ。……大丈夫ですよ、リコル様ならきつと強い御子を産んでくれるでしょう」

魔属が遊ぶためではなく子孫を残す交尾の場合、相手の魔力の半分を自分の魔力に置き換える必要がある。その為精気に込める魔力量は、普通に交尾する時の10倍以上、尚、遣り取りには興奮の度合いによっても変わってくるのだが、それだけの魔力を与えなければならぬ。特に強い子供を産んでもらうためには母体の魔力を奪うわけにはいかないので、魔力を与える分、雄は快復するまで弱ることになる。逆に母体は分けられた魔力を取り込み混ざった魔力を

馴染ませる必要があり、そこで相性が悪ければ魔力同士の反発によって命を落とすことになりかねない。子孫を残す行為は雄にとっても雌にとってもある意味では命がけなのである。尤も初めから多くの魔力を分け与えるのではなく、少量で試して相性が良いか悪いかを見るのが通例だが。

ルーデリクスの場合、精気だけでも凄まじい魔力が込められているため、相性を見極めるだけでも命がけの行為である。快樂のために抱いて腹上死することが当たり前で、逆にアリサのように交わるだけでなく、それなりに多くの魔力を与えられながらもぴんぴんしているのはかなり稀少である。ルーデリクスも若かりし頃は一夜限りの（女にとっては最後の）関係をしたものだが、最後には死体を抱くことに虚しさを感じ、それ以降女つ気は全くない。アリサが異世界からやってくるまでは。

ルーデリクスは失うことを畏れていた。交わることで、朝起きれば冷たくなっているのかもしれない。強き者が子孫を残すのは当然のことで、族長達は日々その義務を怠ることはない。

「うわゝ、照れてるんですか陛下。リコル様だったら可愛いけど陛下だとちょっと気持ち悪……いや、不気味ですよ。……っと、怒らないでくださいって」

殺気の込められた一睨みに、ジェイルは慌てて謝った。要求するようにルーデリクスがコンと指で机を叩く。ジェイルは手にしていた書類を差し出した。読み進める内にルードの機嫌が急降下していくのが手にするよう判る。

「これでも十分だと思いますけどねえ」

それは先日アリサを誘拐した首謀者、マリアの処遇についてだった。ルーデリクス自ら手を下すのも吝かではないのだが、現状ではそんな暇はない。例の天変地異の被害が予想以上に大きいのだ。ルーデリクスの怒りは正統なものであり、寧ろ目出度いこととして、領土に帰っていった族長達はルーデリクスを責めることはなかった。

「うーん。バース殿は全く関与してないですし、マリア自身が強い雌であることも……だから怒らないでくださいってば！リコル様を呼びますよ」

執務室を充滿する刺々しい魔力が一気に霧散した。リコル様効果様々だとジェイルは深く溜息をつく。その間に何事か紙に書き付けたルーデリクスはそれをジェイルに渡した。

「確かに妥当ですが……本当によろしいのですか？」

怒り具合からすると不本意そうだが、それでも種の存続を優先するらしい。妙なところで真面目というか、だからジェイルは自らルーデリクスに仕えている。冷酷で慈悲深いこの魔王に。

「判りました。ではこのように手配します」

ルーデリクスは頷くと、庭を駆け回っているであろう愛しい人の元に向かった。

初秋の香りを含む風がカーテンを揺らしていく。アリサは領地が漸く落ち着いて帰ってきたシエナとお茶を飲んでいた。開口一番にシエナが行ったのは謝罪だった。

結局あの事件が起こって以来、ルードの過保護っぷりは跳ね上がり、ザイが傍にいなければ歩くこともままならないのが現状である。今回はアリサも反省してそれを大人しく受け入れていたのだが、べたべたべたべたと四六時中、大の男が引っ付いているのには辟易していた。とうとうきれて、ザイを連れて行くのを条件に出歩くことを許されたのが四日前のこと。壊れた首輪は復活し、以前よりも強力に、そしてアリサでも封印がある程度までは解けるようになっていく。これは最低限自分で身が守れるようにするためだ。

尤もあのルードの本気を目の当たりにした魔属達が何かをするようには思えないが。

それから領地の被害やマリアの処遇が語られ、その間アリサはずっと聞き役に回っていた。勿論シエナは話すのを嫌がったがアリサの懇願を受け容れ、渋々話してくれた。原因の大元はマリアであるが、アリサの軽率な行動が起こした事態をきちんと受け止める必要があると思ったのだ。

「教えてくださってありがとうございます、シエナさん」
「礼を言われるほどもありませんよ。さて、日も暮れましたし、そろそろお暇します」

衛兵を連れて去っていくシエナを見届けて、アリサはザイにルードの所まで送ってもらった。

膝の上に跨ったままアリサは腕を回して抱きついた。何時になく積極的な様子にルードの困惑が伝わってくる。その場にいた文官は

ルードから無言で退出を命令されて出て行った。邪魔したなと思いつつも、今は離れる気になれない。

脳裏に蘇るのは、シエナの言葉。

「マリアの処遇ですが、今は四肢を切断されて自室に監禁されています。私達の罰は族長がマリアとの間に子供を作ることに決まりました。子供さえ産めばマリアは死を賜ることが許されています」

シエナがそれは陛下の温情と言った。本当に重い刑罰は、生が尽きるまで永遠に苦しみを与え続けることだと。それを聞いた私は、ただ馬鹿だなあと思った。憐憫でも同情でもない。私は聖人君子じゃないから。ルードが来てくれなければと想像するだけで今でもぞつとするし、益してあんな酷い目に遭わせてくれたマリアの命を嘆願するほどお優しい人間ではない。魔王の所有物に手を出せばどうなるのかくらい判ったはずだ。すっかり魔界の住人思考に染まっていることに苦笑しこそすれ、嫌悪することはない自分に驚き、同時に嬉しかった。

非力な存在で、この世界では誰かの手を借りなければ扉一つ開けられない。魔界へ来たからには魔属だと。そう言われても魔術一つまともに扱えないことが不安で嫌で仕方なかった。培ってきた常識は全く通じず、ルードからはいつ見捨てられるか判らない日々。元がネガティブ思考だけに、考え出せばどこまでも下降していく自分に嫌気が差しながらも止められなかった。

だからほんの僅かな切欠で良かったのだ。ルードとの距離感が変わるのを心の底で願っていた。その結果。

私はこの美しい魔王を手に入れた。曖昧模糊としたものではなく

目に見える形で。なんて醜い感情なのだろうか。気づかなければよかつたのに。結局は私もマリアと大して変わらない。この美しい魔王を手に入れる為には手段なんて選ばない。邪魔があれば排除する。そう、例え自分自身であっても。

「アリサ？」

貴方には知られたくない。こんな汚い私を。だから封印するの。何十にも鍵をかけてそつと心の奥底に。愛してるなんて、自己中心的な想いは絶対にサトラレテハナラナイカラ。

リコル様、狂愛（後書き）

というわけで、連投終了です。長文、お疲れ様でした。

凶鑑を見てみよう

「ふ、ふふふあはっはっははははは……」

重厚な城門前で高らかな哄笑が響く。その持ち主たる人物は、すっかり線の細くなってしまった己の身体を抱きしめ、両目から涙を流す。

「やっと。やっと、戻りました。ああ、ボクの愛しの魔王様」

城門を隔てた先にある、極上なるものを想像するだけで涎が滴り落ちてくる。ぶかぶかな衣服をたくし上げ、男は意気揚々と足を踏み出した。

首元を飾る慣れない首輪、もといチョーカーを指で緩めながら、アリサは凶鑑を捲っていた。その名も『魔属種族名鑑』。三代前の画家だった花嫁が作ったもので、精緻な絵で紹介されている。珍しさの度合いで紹介されるページ数が上がっていくという、一風変わった凶鑑だ。

「確かにこれは俺でも解読不能だなあ」

「リコル様が読めなくとも無理はありませんよ。これは文字ではありません」

「良かった。ちょっと心配になって」

少し離れた席では、シエナとサハンが一枚の紙切れと睨めっこしていた。それはこの間の事件の発端となった手紙で、アリサが自分

の解読能力がないのではとやや不安に思い、実際に教師の二人に見て貰うことになったのだった。この部屋を卒業して随分経つが、埃一つ無いのは定期的に誰かが掃除をしているのだろう。

「寧ろこれから文字を拾えたアリーがすげえよ」

「サハンの悪筆に返事が出来るくらいですからね」

「んだと?!俺の文字はそりゃ達筆で」

「これだけ崩しておいてよく言いますね。前から思っていました、貴方の書く文字は角度が」

言い争う二人に、ここへ来たばかりを思い出し懐かしくなってしまう。二人の会話をBGMに凶鑑を眺めていたアリサは興味深げに捲っていた手を止めた。

「ねえ、サハン」

「それはお前に関係ねえって……ん?どうしたアリー?」

「エヴォリーってこれなの?」

若干涙目のアリサにサハンは慌てつつも、指差した箇所へと視線を落としたサハンは頷いた。エヴォリーとは魔王の補佐官の一人で、外見25歳くらいの気弱な人物である。因みに種族は石族の中の亜種で百目鬼族出身である。

「まあ、あいつの場合はまだ若いから目の数がもつと少ないと思うぜ」

「年を経るごとに段々目の数が増えていくんですよ、百目鬼族は」

モザイクをかけたいほどグロテスクな様相のそれは、モアイに似ているのだが決定的に違うのは顔面至る所に散らばる目の数である。目の数が100になると長老と呼ばれ、目の一つ一つが邪眼になる

そつだ。直視すると石になるとか。……怖すぎる。

「もしかして淫族とか竜族もこんなだったりとか……？」

正直二人の本性がこれとどっこいだったら、暫く向き合える気がしない。つまりルードもあれが本性じゃないとか？魔王城にいれば必然と人型になるので気にしたことはなかったが、怖いもの見たさというか、なんだか気になってきた。

「お。俺達のページはここだ。んで、ドラゴンがこっち。な？全然違うだろ」

まだあの時のことを引きずっていたのかと思いつつ、アリサは本に目を落とした。成る程、竜族の低位種であるドラゴンは西洋の御伽噺に出てくるような姿で、竜族はアジア系の蛇のような姿が本来の姿らしい。

「ザイもこんな感じなんだ？」

「僕はまだ成体ではないので角がないんです」

「俺はちゃんとあるぜ。まだ五本しかないけどな」

「竜族の場合は鱗の色が金色なほど力が強いんですよ。成体と幼体ではまた違いますが、今の長であるロエジン殿などはそれは美しいと言われています」

「ロジンのおじいちゃんか？」

議会の際に年若い綺麗な奥さんと共にやってきた竜族族長を浮かべ、さもありませんと思つた。アリサにとっては茶目つ気たっぷりな気の良いおじいちゃんだが、あれでも魔界の重鎮で恐れられる存在なのだとか。

「あの長をそう呼べるのはアリーだけだよ」
「実際のあの方はそれはもう、余程魔王らしいというか、いい歳なのはどうしてあんなに元気なのでしょうね」

金の瞳を絶望に染める竜族兄弟に、面倒くさそうだとアリサはそれ以上突っ込むことはやめた。隅っこでキノコの栽培をし出した兄弟を横目に、再び手を動かし始めたアリサは最終ページを見て目を点にした。

「魔王族って……」

種族なんですか。知らなかったわー。

「魔属の中で最も異端で且つ珍しさの観点からでも最高ですよ、あの一族は」

「魔王って魔属の王だから魔王だと思ってた」

「それも間違いではありません。王になるべくして生まれるのが魔王族なのでから」

……意味不明です、シエナさん。

説明がさっぱり判らないので、説明文に目を通すことにした。

種族：魔王

生態は不明。人界に生息する人族によく似ているが、その内包する力は比喩ものにならない。別名王族とも言われ、世界を統べる王になるべくして生まれた種族。類似した種族には天王があり、それらを合わせて王族に分類される説もある。

「……つまり、ルードはルードなんだね」

より詳しく説明しようとしたシエナだが、満面の笑みを浮かべるアリサに口を開くのをやめた。逃げたともいうが、凶鑑を元に戻すとアリサは虚空に向かって呼びかける。

「ルード」

魔王の御名にさっと顔色を変えた一同は慌ててその場に膝をつく。程なくして姿を現した魔王は無言でアリサに問いかけた。

「あのねー。今からみんなの本当の姿が見たいの。……うんうん、約束する。……やった！ありがとルード」

頭を下げている三人はアリサの独り言しか聞こえない為どんな遣り取りが成されているのか判らない。が、これからすることは何となく判ってしまった。

実際に比べてみよう(前書き)

タイトル通りの内容です。長いので分けました。

実際に比べてみよう

実に良い天気だ。そんなもって、王城の一室一室がバカでかい理由を思い知った。目の前の光景を見れば誰だって納得するはずだ。

「ジェイルさんもおつきいのは意外だった」

「良ければ触ってみますか？あんな下位種族など比べものにならない触り心地を保証しますよ」

こいつもか。

あんな、と巨大な銀狼もどきが睨みつけるのは、演習場の入り口付近で落ち着かなげにこちらの様子を窺っているケルベロス達のこと。彼等は獣族の中位種族で、ジェイルさんが管理する側になる。魔属のこの辺りのプライドがよく判らない。

恐る恐る撫でてみれば、成る程。うつとりする極上の手触りだ。試しに顔を埋めてみたらルードから引き離された。なんで？

「大人げないですよ、陛下。……うわ、冗談ですって」

ルードが突然火柱を上げ、それを巨大狼ことジェイルさんが間一髪で避けていく。

……あの毛皮を燃やすのは勿体ないよ、ルード。……まあ、いつか。きつとルードもストレスが堪ってるんだね。

それを聞けば即座に否定が返ってくるのだろうが、アリサが口にすることはなかった。気を取り直して（放置ともいう）演習場に横

たわる二体の竜へと近づいていく。五本の立派な角が生えているのがサハンで、サハンに比べてやや小さいのがザイステールだろう。流石兄弟、鱗の色や目の色がよく似ている。

「こつやつて見ると二人とも大きいんだね」

『乗ってみるか?』

「心惹かれるお誘いだけど、今日はやめとく」

『そうですね、兄上。そんなことをしたら、陛下に叱られます』

「ルードは別に怒らないと……思うよ、きっと。多分」

語尾が段々と小さくなっていく。ルードのここ最近の過保護ぶりを見れば、あながち嘘ではないと言い切れなかった。叱られる程度ならばまだいいが、最悪首を落とされることになりかねない。

「シエナさんはあんまり変わらないんだね」

「私とサハンでは食べるものが違いますからこればかりはね」

そう言いながら苦笑するシエナさんは、あの甘ったるい香りと長い尻尾を除けば、なんら変化はなかった。彼等が糧とするのが主に人間の精気だからだろう。

『そろそろ戻っても良いか?正直かなりきつい』

『僕もです』

「あ、そっか。いいよ。ごめんね、二人とも」

その言葉に再び人型に戻った竜族二人組は、降りかかっていた重圧から解放されて大きく深呼吸した。面積が広がればそれだけルードの魔力を浴びる面積が大きくなり負荷がかかるのだ。一時的にルードには抑え込んで貰っているがそれでもきついらしい。尤もその原因はルードだけでなくアリサにもあるのだが、本人は気づいてい

なかった。

「情けないですね」

「うるせ。こっちは淫族と違って大きいんだよ。そういうお前だつて来たばっかの時はあてられてたくせに」

「負け惜しみですか。見苦しい」

「このやる。だったら勝負でもするか？」

「あ、兄上。シエナ殿も」

「あれは止めるだけ無駄。放っておきましょう」

こちらはこちらで魔術の攻防が始まった。随分と遠くで行われているそれに比べればこちらは可愛いものだ。被害が及ばないよう、端に移動する。

「風よ、切り裂け！」

「はん、そんなもん効くか。鉄壁！」

魔術とはイメージなので、言葉そのものはイメージを補助するものでしかない。つまり、無音でも出来るはずなのだが。

「一応配慮してくれてるのかな」

怪訝そうなザイに何でもないと首を横に振って、アリサは暫し観賞していたのだが、急に力を引きずられるような感覚に囚われた。くらりと視界が揺れる。眩暈？

気づけばザイに庇われるようにして、地面に尻餅をついていた。その背の向こうには、幽鬼のような青白い顔にちょこんと片眼鏡をかけた男が、恍惚を浮かべて立っている。

「ああ、実に美味しい。まるやかで口当たりも良い。ふむ、何と極上な餌なのでしょうか」

「それ以上近づかないでください！攻撃しますよ」

「ふむ。小竜が生意気ですね。お前も喰らってやりましょうか？」

「この魔族風情が！」

ザイの唾棄するような言い方にアリサは目を瞬いた。あのザイが珍しい。

「魔族……？」

「正しくは魔族、ですよりコル様。先程の凶鑑第六章四二節に載っていた」

ちらりと見ただけでよく憶えてますね、シエナさん。というか喧嘩は終わったのかな？

「アリサ」

気づけばルードの腕の中に囚われていた。すっかり慣れてしまった濃密な魔力の気配に、アリサはほっとする。

「ご機嫌麗しゅう、ボクの陛下」

「お帰りなさい、ウオーリー。タイミング悪すぎです」

「ジェイル様も相変わらずですね。それで？そちらの陛下に劣らぬ美味しいお嬢さんはどなたですか？」

「美味しいって、それは陛下の前で言っちゃまずいって。……あーあ」

ジェイルが言い終わる前に、ルードの手の平から真つ黒な珠がウオーリーへと飛んでいった。籠められた魔力の量から上位魔族すら

も消滅させん勢いだが、それはウォーリーへと当たる直前に消えてしまふ。

「うえっぶ。うーん、なかなか素敵な悪意ですね。お粗末様です」

「ご馳走様でしたとでもいうようにぺこりとウォーリーが頭を下げる。

挨拶をしてみよう

「どづいうこと?」

アリサの見間違いでなければ、それは一瞬にして消滅してしまった。ルードの本気ではないのだろうけれど、あの珠はどこに消えてしまったのだろうか。

「魔族はああやって他者の魔力を糧にする一族なんですよ。リコル様も先程喰われたでしょう?」

「え、そうなの?」

驚きに顔を上げればルードのやや呆れ視線が返ってきた。う、だつてしょうがないでしょ。魔力感知は苦手なんだから。自分の力くらい把握しておきなさいって……はあい。

うおっほんと隣から聞こえたわざとらしい咳払いに、アリサは我に返る。

「お二人の世界に入られるのも結構ですけど、無視しないでくださいよ。寂しいんで」

「ごめんなさい、ジェルさん」

「……」

「はいはい、リコル様は大変素直で結構。誰かと違ってね」

一言余計です、ジェルさん。肩当たりに回された腕を慰めるように叩いていると、渴いた拍手が響いた。

「素晴らしい!まさか貴方が噂のリコル様だったとは。陛下共々末

永くお願いしますよ」

「はあ、それはどうも。……とうかすっごい今更ですけど誰ですか？」

「うんうん、今更ですよー、本当に。ボク、無視されるのって大嫌いなんですけど、リコル様は気に入りましたから許してあげます」
「ありがとうございます？」

なぜか疑問形になってしまっ。

「礼ではなくそこは怒るところです、リコル様」

「あ、はい。ごめんなさい」

「だから……」

はあ、と諦めたように溜息をつくジェルさん。なぜかルードにまで頭を撫でられた。その生暖かい目はなんでせう？ルードさんやお前はそのままいろいろ、って……うん？よく判らないけどりょかいです。

うおっほんとまたもや注意を引く咳払いに、アリスは慌てて音源へと向き直った。ルード達と話していると直ぐに話が脱線してしまっ。

「ボクの名前はウオーリアス。見た通りに魔族出身。外交官として天界との折衝役を担当しています」

先程の幽鬼のような姿ではなく、食事を終えて活力を取り戻したウオーリーが複雑な作法に則って礼を取る。アリスはルードの囲みから抜け出すと、差し出された手に自分の手を重ねた。

確かこれで合ってるはず……だよな？

背後からお叱りが飛んでこないのだから大丈夫だろう。正式な礼を取る者なんて滅多にいないために、半ば埋もれかけていた作法の知識を掘り起こす。

「私は今代魔王のリコルです。初めまして、ウォーリアスさん？」

アリサが名前を呼んだ瞬間、重ねた手から仄暗い黒の光が二人を包む。それが収縮するのを見届けて、離れようとしたアリサだが、外見に合わぬ強い力で腕を握られた。痛い、と抗議する間もなく手で包み込むように握られる。

「リコル様」

やばい。

今すぐにも離れなければと頭の中で警鐘が響いているのだが、どうすればいいのか判らない。呪縛に取り憑かれたように固まっている。

「そこまでです」

音もなく現れたジェイルさんが、鋭い刃のように尖った爪をウォーリーの首筋に当て、アリサは再びルードの腕の中に囚われていた。

恍惚を浮かべて狂気に染まっていた瞳は徐々に元の落ち着きを取り戻し、それを悟ったジェイルは爪を元に戻した。

「全く、油断も隙もないですね」

「ボクとしたことが失敗しましたね。これでも慣れていると思ったんですけどねえ。リコル様があまりにも魅力的なものですからつい理性が飛んでしまいましたよ」

「これからは気をつけてください」

「ふふつ。了解です」

当然ながら魔界の情報は天界にも入ってくる。噂に違わぬ魔王のリコルとして期待以上だったことにほくそ笑みながら、ウォーリアスは肉眼でも辛うじて確認出来るほどの距離にいる二人を見た。

鮮やかな手際で転移を果たしたルードにアリサはほつと肩の力を抜いた。今ばかりはルードのお叱りも甘んじて受け容れる。

……気をつけろとあれ程言っただろう

甘美な魔力は少しでも加減を間違えれば強力な麻薬になる。ルードもジェイルもそれを危惧しているからこそ、口を酸っぱくして魔術の訓練をしろと言っただけだ。

「……ごめんなさい……うん……はい……気をつける」

判ってはいるが、こればかりは自分でもどうしようもない。一応訓練は毎日欠かさずしているのだ。それでもまだ全然足りない。もっと、上手くならないと捨てられる。

「アリサ」

呼ばれて漸く俯いていることに気づいた。唇に伸ばされた長い指が、赤い雫を拭き取る。どうやら唇を強く噛み締めて切ってしまったらしい。

どうした、と覗き込まれ、アリサは何でもないと首を横に振る。

この感情をルードに知られるわけにはいかなかった。尚も追及しようとする眼差しに背を向けて、何でもないので態度で示す。丁度運良くジェイルが腕を振っていることに気づき、アリサはその場を逃げ出した。

遠ざかっていく背中に腕を伸ばしかけたが、躊躇うようにルードリクスは腕を降ろした。あの様子では聞いたところで何も答えないだろうことは難くない。指先にこべりついた赤い血がそれを示すかのようで不快だった。

読んでみよう

ウォーリーの帰還もあって、魔属の品評会ならぬ比べっこは一旦お開きとなった。改めてルードの執務室に場所を変えて、腰を落ち着ける。政治の話となればアリサには関係ない。はず、なのだが。

「天界も変わらないようですね。安心した」

天王が遊びすぎて一晩で国土の25分の1が消失したとか、人間の供物が例年よりも少ない、嫁が見つからなかったなどを報告するウォーリー。ていうか、嫁さんて……。

「天属と魔属は古から縁が深いんですよ。因みに俺の三番目の奥さんは天馬属の出身です」

「え？という事は狼と馬の融合？」

どうやって交尾……ごほん……夜の営みをしていらっしやるのか少々興味が。……なんなら見せて貰うかって……いやルード、そこは隠そうよ。プライバシーの侵害だよ。……え？だって恥ずかしいって、んぎゃー！ここで盛るなァー！

何がどうなっかってこうなったのか、突然ルードにがばつと押し倒される。流石に他人に見られる趣味はないので、思いつくままに抵抗してみる。具体的には蹴ってみるとか叩いてみるとか。

気づけば、ルードの片手で両手を机に押さえつけられていた。

アレ？これってかなりまずい？

「ル、ルード落ち着いて。ね？ほら、周りを見て。ジェイルさんとカウオーリーとかいるから。ね？」

……問題ない。

「大ありだから！ジェイルさん、へるぶみー！」

貞操の危機ですよー。ていうか、いい加減助けるや。という視線を必死にジェイルさんへと送ってみるのだが、当の本人は至って優雅に茶なんぞ飲んでいやがる。

「うーん、俺としては別にこのまま世継ぎ設けてくれると嬉しいんですけど」

「ないない！子供は十月十日かかるから」

「たったそれだけで生まれるのですか？でしたらばんばん強い世継ぎを作ってもらわないと。ね、陛下」

「ルードも領いちゃだめえー！」

「……ああ。そういえば、陛下はまだリコル様と寝間の儀式をされてませんでしたね」

ジェイルさんの言葉を聞いた途端、ルードの動きがびたりと止まった。その隙を縫ってアリサはずり落ちそうなドレスを手で押さええながら、起き上がる。

あ、危ない。公然の場で猥褻行為をしようところだった。

一難去って一息ついていると、ウォーリーがにこやかな笑みで手招いていた。アリサは少し警戒しつつも素直に隣へ座る。

「なんでしょうか」

「話が長くなりそうですから、リコル様にお相手して頂くかと」

二人の視線が向かう先は、真面目な顔をしたジェイルさんとルードの思案顔。うん、確かに長くなりそうだ。

「ウォーリーもルードのことが判るんだ？」

ルードの表情筋は滅多に動くことがない。それも相まって、ルードはとても判りにくい又何処かの長が零していたのを知っている。

「ジェイル様のように会話までは流石に無理ですけど、慣れてますからねえ。どこもかしこもトップがああたと本当に嫌になっちゃいますよ」

「他にもルードみたいな人がいるんですか？」

「どんだけシャイボーイが多いんですか。まあ、ルードの場合はちよつと違うけどね。その分言葉にした時の威力が半端ない。普段無口だからこそ、言葉一つ一つが特別に思える。」

「陛下とはまた違った種類ですが、あちらの王もまた面倒な人で……」

……ルードも面倒なんだ。

当の本人を前にしてここまで忌憚無く話すウォーリーは凄い。別にルードは悪口聞いたくらいで怒る人じゃないけど、基本的に恐れられている。それは存在そのものに本能的に恐怖を感じるらしい。だからみんな、ルードとは一歩退いていて（王様だから仕方ないんだろっけれど）、ジェイルさんとかウォーリーは貴重な人？材だ。

これからもルードを末永くよろしくなんて思っていると、ウォーリーががさがさと自分の身体を漁っていた。食事を終えたウォーリーの身体は丸々と肥えて、少しでも衝撃を加えれば服がはち切れそうだ。ここでストリップショーはやめてほしいな、なんて不埒な想像をしていると、それは服ではなく虚空から現れた。

「こちらを預かっていたのを忘れていました。天王よりリコル様宛です」

「……私？」

なんで？

面識もない相手から手紙を貰ったことなど未だ嘗てあっただろうか、いやない。

差し出された手紙は目も眩むような金色で、文字は鮮やかな光沢の緑色。縁取りは複雑な文様が描かれており、一言で言えば豪華だった。何となく嫌な予感をしつつも受け取る。恐る恐る宛名を読んでみると、確かに私、というか魔王のリコル宛になっていた。……これ、開けなきゃ駄目かな？

「どうぞぞ？」

隣から促される。アリスは躊躇いつつも糊代に指をかけた。そこで一呼吸置いて、思い切って開けてみる。漢らしく封筒にえいやつと手を入れて手紙を取り出した。隣からおおーっと大袈裟に拍手が挙がる。ノリが良いなあ、ウォーリー。

手紙はあぶらとり紙と同じくらいぺらんぺらんだった。これまた薄い金色の透かし紙のようである。芸術のような作品を粗雑に扱う

のも憚られて破らないように細心の注意を払って開けてみると。

「文字が……ない？」

覗き込んでいたウォーリーも目を点にしていた。透かし紙らしく透かしてみても、炎で燃やしてみても……あ、燃えた。

ウォーリーが即座に水を出してくれたので事なきを得たが、危うく火事を引き起こすところだった。あ、危ない。

「手紙を燃やすなんて何を考えてるんですか！」

「いやあ、炙り出しかと思って」

柑橘系の汁で文字を書くと、火を当てた時に文字が浮かび上がるのだ。そう説明してやると、ウォーリーは納得がいったようだ。

「悪戯とか？」

きつとそうに違いない。そうだ、そうしよう。

不吉な手紙を強引に処分しようとした時のことだった。声が聞こえてきたのは。

『燃やすんじゃないねえー！』

フリッシュュ + 衝撃 = ? (前書き)

新章です。newです。短いです。

フラッシュ＋衝撃!!?

「え、誰？」

「リコル様？」

「今、声が聞こえたような……」

しかもかなり低い、ダンディーな声が。あれでもっと落ち着いた話し方ならさぞかし素敵（な声）であろう。乱暴なところが残念だ。

一通り幻聴に対する評価を下して、何してるんだろう自分、と少し落ち込んだ。頭の中の妄想に一人突っ込みなんて痛すぎるよ!! 疲れてるのかな？うん、きつとそうだ。私の睡眠時間を削るルードが悪い。昨日の夜だって散々……。あー、駄目駄目。忘れろ、私！

今更ながらに隣にウォーリーがいることに気づき、アリサは固まった。

やってしまった。

「あれ。もう終わったんですか？残念ですね。面白かったのですが」
「デスヨネー」

うっ、恥ずかしすぎる。

何となくばつが悪く思いながらも、アリサは作業に戻ることにした。ルードとは目で会話が成立してしまう間柄だけに、最近では声に出すことが少なくなってきた。これはちよつとまずい兆候なのではないだろうか？例えば誰かに助けを求めるとして、目で訴えたところで判るだろうか。眼力を鍛えなければまず無理だ！だっ

たら眼力を鍛えればいいのか。ところで眼力って鍛えるものだった
つけ。

湧き上がる疑問に考え込みながらも、今度こそ手の平から炎を出
して手紙を翳す。

『燃やすん』

「アリサ！」

「じゃねえーつつてんだろ！」

幾分か切羽詰まったルードの声が私を呼び、驚いた弾みで手元か
ら手紙が舞い落ちる。しかし手紙が床に落ちることはなく、空で眩
しく発光したかと思うと、代わりに地面を叩いたのは四本の足だっ
た。

急な光のせいで視界が白い。慣らすように何度も瞬きしていると、
急に何かに引っぱられた。

「え、何？」

「行くぜ」

「どこへっ……うわぁっ！」

首に生暖かいものがかった次には、ぼいと大きく放り飛ばされ
る。下から吹き上げる風を全身に浴びたと思えば、身体が何かに軽
く衝撃を受けて止まった。次いで今度は正面から受ける強い風。

一体何が起こったのか判らない、瞬間の出来事であった。

空の旅＋美少年Ⅱ？

この世界ってほんと、何でもアリなんです。空へ空へと太陽を指すかのように上昇していた次の瞬間には天地がひっくり返ってた。うん、あれは吃驚したね。時間まで変わったみたいだし。さっきまではあんなに晴れていたのに、今空を彩るのは無数の星々。しかも下を見れば、緑生い茂る大草原、ではなく生物は疎か、草木一本も生えていなさそうな荒れ果てた大地。なんでそんな細かく見えるかといえば夜空が明るすぎるから。星で埋め尽くされてるんじゃないかと思うくらい明るい。そして私が跨っている馬はその光を受けてきらきらと輝いている。

『馬じゃねえよ、コラ。んな下等なヤツらと一緒にすんじゃないよ』
と否定する馬。

『だから』
『天翼馬、でしょ』
『おう、わかってんじゃないか』

もうおわかりだと思うが、私がいるのは魔界でもなければ、勿論元の世界でもない。そう、ここは天界。魔王ではなく天王が治める世界。

ウオーリーから渡されたのは天王からの招待状だったのだ。

『たく、天王だぞおめえ。普通燃やすやつがいるかよ』

未だ根に持っている、この馬、もとい天翼馬のロシエ。どうい

仕組みだか、彼は手紙へと変化していたそうで、元は私を一通り困惑させた後に登場、後、天界へと案内する役柄だったらしい。何だか腹立たしい登場の仕方だが、それは天王の指示だという。

ところが私に燃やされそうになったため、急遽変更。その中には魔王の私に対する執着も理由の一つかもしれないが、よく見れば、尻尾の先が無残に縮れている。ちよつと滑稽だ。

「だって、私は天属じゃないもん」

『バツカ、魔王と天王は逆らっちゃいけないエ代名詞だぞ、コラ。あの人達の恐ろしさを忘れんじゃねえぞ、コラ』

そう言われても、私はルードの恐ろしさなんて知らない。寡黙すぎるあの王は何時だって私に優しくかった。抱きしめる腕も、包む柔らかな魔力も決して私を拒絶することはない。それが私の知るルードの全てで、ジェイルさんやサハンなどに聞くルードはあくまで私の知らない魔王だ。それがどうしたというのか？人によって見せる一面が違うのは当然のことで、私だってルードに全てを明かしているわけではない。ルードが私に見せようとしなければ、それは見てほしくないのだ、きつと。

「私はルードを恐れないし、ルードは私に恐れさせないもん。だからそれでいいの」

だから見ないふりをする。

しかし、ロシエは私の返答が気に入らなかったようで、ブルブルと鼻を鳴らした。そうするとやっぱり馬にそっくり。

『だから俺は……おい、見えてきたぞ』

その言葉に手元へと落としていた視線を前方に戻したが、生憎とアリサの肉眼では捉えることが出来なかった。しかし、界を渡る程の脚力を持つロシエの力強い蹴りで瞬く間にその全貌がアリサの視界に入ってくる。

まるでオアシスのようだった。荒れ果てた大地にぽつんと（といってもその大きさは巨大）一箇所だけ栄えているのは何とも奇妙な光景である。家を形作る白い壁が星々の光を受けて淡く発光し、街全体が光のヴェールを纏っているようだ。幻想的で美しい。

「綺麗」

「だろ」

「なだけにその周囲が残念」

「っ！テメエ……」

そこだけが完璧すぎて、逆に気持ち悪いとでも言おうか。どうせなら他も綺麗にしておいてほしい。だからこそ、街並みの美しさが際立つのかもしれないが。

遊び心を持っているかと思えば、興味がない。それでいて、一つに執着を抱く。天王像が全く見えない。

一体どんな変人だろうか、と考えているうちにロシエが大地を踏んだ。馬の割には実に快適な旅でした。

ロシエが本性を解いて人形を取る。金の髪に褐色の肌をした尊大な美少年がアリサの隣に現れる。どうやら魔属とは違い、本性と人形の色は全然違うらしい。というか、美少年のくせにソプラノではなく低いテノールというのは詐欺だと思う。（「余計なお世話だ！」

美しい装飾の施された白い門を通れば、そこは巨大な宮殿の入口。上空からある程度の外観は判っているつもりだが、正面から見れば圧巻だ。白一色で統一された宮殿は、素人目にも判るほど細やかな装飾がかしこで見受けられ、シンプルなはずなのに豪華な印象を与えている。一歩間違えば派手にも見えるのだが、彫りの強弱を付けることで品の良さが保たれていた。黒一色で統一されているアリサが一点の染みのようで、申し訳なく思えてくる。廊下で時々飾られているへんてこな像は……見なかったことにしよう。

「ここだ」

誰ともすれ違う事なく辿り着いた扉には、(ここへ来て初めて見かけた)白以外の色が使われていた。金銀白金。派手派手し……いや、豪華な扉は一目で特別なことがわかる。

胸元を大きくはだけさせて褐色の肌を晒しているロシアが、乱暴に扉を叩くと返事も待たずに扉を蹴った。

「ええー」

「んだよ、とつと入れ」

ああ、美少年のくせに。折角の綺麗な顔がメンチを切っているのが悲しい。魔属ならばその特性上、自身の魅力を最大限見せつけるための技術を心得ているだけに実に残念だ。諦めたように溜息をつくと、アリサは扉をくぐった。

人形 + お茶 II ? (前書き)

お待ちせ致しました!! 続きです。暫くこんな調子が続くと思われ
ます。

人形 + お茶 II ?

やはりというか、室内もこれまたやたらと煌びやかであった。その最たるものが部屋の中央に鎮座する豪華な椅子であり、そこに腰をかけている人である。背後に薔薇が咲いているように見えるのは目の錯覚だろうか。見事な金の巻髪に琥珀色の瞳のその人は、フリルだらけの衣装もあいつて等身大のビスクドールのようだった。その人が全身から発している芳しい香りが、離れたアリサの鼻まで届く。

「ふむ。随分と遅かったではないかね、ロシエ」

欠伸を噛み殺しながら、形の良い赤い唇が言葉を紡ぐ。腰にくるような蠱惑的なテノールがアリサの耳に届いた。

「るせえ！こっちは燃やされそうになるわ、貶されるわで散々だったっつーの」

「ふむ。それは是非とも見てみたかったね」

……見たかったんですか。

「てめえのせいだろうが、おい」

「ああ、駄目だよそんな睨んだりしては。君の唯一の取り柄が台無しだ」

流麗な曲線を描く眉が中央に寄る。

「どんな顔しようが俺の勝手だ！んなことより、俺は部屋に戻るぜ。界渡りして疲れてんだよ」

ゴキゴキと首を鳴らす姿は本当に外見に似合わない。つくづく残念だ……。 (重要なので何度も繰り返しますとも)

「ああ、ご苦労だったね。ついでにお茶の用意と音楽の準備を頼むよ」

「んなこと、自分でやれー！」

ばんとやや乱暴に扉が閉じられる。その背を見送っていたアリサは、捨て科白に思わず同意しそうになった。が、室内にいるもう一人の存在が、咄嗟に思いとどまらせる。

「やれやれ仕方ない子だ。そう思わないかな、ルドヴィーのリコル？」

こつち来た〜！というか、今更ですけどどちら様ですか。何となく想像はつくのだが、神話の中のゼウスとかゼウスとかゼウスとかを想像していただけに、これと……いやこの方といまいち結びつけない。確かにギリシャ神話の神々は女の子を追っかけ回したり、浮気を咎めたりと人間くさい姿が目立ったものだが、それでも映画に出てくる神は偉そうで髭を生やしていて何となく神々しく感じさせたものだ。

だが、これは。

「ああ、そうだ。肝心の自己紹介を忘れていたね。我は天王ジルシールだ。気軽にジルと呼んでくれ。ルドヴィーのリコル」

有り体に言ってしまうえば、宝塚の主役でも張ってそうな人というのがぴったりだ。この赤い薔薇を一輪差し出すようなきざったらしい仕草とか。

……薔薇なんて一体どこから出したんだろう？

「ふふつ、それは秘密だよ。その方が謎めいて見えるだろう？」

と、長い人差し指を唇に当てて微笑むジルシール。

うへえ。

心の中でドン引きしていたアリサは唐突に我に返る。もしかして、この人……。

「あ、あのー。てん」「ジルだよ」……ジル様って心が読めたりと
かってするんですか」

挙手してしまったのはそれだけ動揺している印だった。ここにル
ーデリクスがいれば、落ち着けと背中を撫でるなりしたに違いない。

「簡単なことだよ。君はとても判りやすいからね」
「え？」

問い返すとジルシールは、肩を揺すりながらそれだよそれ、とア
リサの顔を指差す。不思議そうに顔を撫でるアリサにジルシールの
忍び笑いが耐えきれずに表に吹き出した。

「成る程、ルドヴィーが君を気に入るのも判る気がする」
「いい加減笑うのやめてくれませんか？」

所変わって、今二人が居るのは花園だった。ジル様の背後で美少

年音楽隊が気まぐれに音楽を鳴らしているのを視界に入れなければ
幻想的な光景である。満天の星々にも劣らない眩しさを宿した花々
が咲き乱れ、膨らんだかと思えば時折鱗粉のようなものを虚空へば
らまいている。ジル様が言うには、この時期にしか見られない稀少
な花であり、この庭園の一角はその為だけに作られたのだとか。

「ところでジル様」

「うん？何かなルドヴィーのリコル」

「服を着替える必要はあったのでしょうか」

是非ともこの服を着てくれ、いや、そんな無粋な恰好では認めら
れない、我が流儀に反する等々と並べ立てられ着替えさせられたの
がこのドレス。

そもそも平々凡々な日本人顔に似合うはずもないのだ。こういう
のは金髪碧眼の少女だから似合うのであって、断じて黒眼黒髪の私
に合うはずがない。そもそも民族からして違うのだから。大体、私
は実年齢から考えれば……やめよう。何だか悲しくなってきた。

などと軽く現実逃避してみるものの、現実が変わるわけでもなく
(なぜかサイズのぴったりだった)この青いエプロンドレスにアリ
サは身を包んでいた。今なら絶対に憤死出来ると断言する。

「服を替えるのに理由が必要なかね？よく似合っているのだから
それでいいではないか」

貴方が良くても私はよくないんです。主に精神面の方で。

流石にそこまで言う勇氣があるはずもなく、溜息と共にお茶で喉
に押し込もうとしたのだが、立ち昇る湯気から香る刺激臭に傾けて

いた手を止めた。

「口に合わないかね？ ルドヴィーのリコル」

「いえ……」

と言いつつも、視線を落としたアリサはカップを持つ指が震えるのを感じた。

これを飲めというのか。

カップからは絶えず煙が上がっており、よくよく見れば湯気の合間から紫色の液体が確認出来た。魔界ではルード自身が人界の食事を真似て（ルードがいうには人間界が魔界を真似たらしいが）いるせいか、お茶といっても紅茶に良く似たものが出てくるので、アリサも特に違和感を持つことなく口にしていた。だがこれは、果たして飲めるのだろうか？ 目の前のジル様を見る限り多分死にはしないだろうが、それにしても飲むのを憚られる代物だ。

しかし、再度促されては小心者の心得として断ることは出来ない。アリサは覚悟して一口含んだ。

何とも言い難い味だった。

無邪気＋無関心〃？

惚気？これって惚気だよな。

煌びらしさを通り越して背後からぶわっとむせ返るような大輪の薔薇が咲いてそうだ…（実際に背後に控えている小姓？（勿論全員が美少年です）三人が左右は籠から花弁を散らし、中央は巨大な花束を持っていた）うん、凝った演出だね。

……最早何も言うまい。

そつと視線を外した私は悪くないと思う。いや、勿論話は聞いているのだがそれ以上に周りが気になってしょうがないのだ。何処の舞台ですかと問いたくなるような派手なりアクションは、いつそ劇場でも開けばいい。脚本、演出@天王。豪華でいいじゃないか。それでいくと私は差し詰めエキストラかな。

「聞いているのかね？」

「聞いてますよ。そのアオイさん、でしたか？がどれだけ愛らしいのか」

ビスクドールが言ったところで嫌味にしか聞こえないのは私が卑屈だから？名前や好みなどから恐らくアオイさんも同じ日本人。とすれば……お互い辛いね。美形を見慣れていればちよつと不細工な方が可愛いとか？それとも蓼食う虫も好き好き、とか。美的感覚はまともなようなので、この二つが有力な説だ。

「ああ、アオイよ。この溢れんばかりの想いは其方に捧げておるのに、なぜつれないのだ。同郷のそなたならば、分からぬか？」

それって、完全に脈無しってことじゃん。気付こうよ、ジル様！

「中々強情な花よ。ふふっ、先日も……」

どれだけつれないのかを事細かく説明してくれるジル様。ハンカチ無しには聞いていられない数々に、同情してしまっ。

「辛いですね、それは」

「ああ、だが我は諦めはせぬ。必ず我のものにしてみせるよ」

健気な姿に、アリサは励ましたいと、なぜかぼんやりとそう思った。「頑張ってください！応援しますから」

硝子細工のように繊細な両手を取って、真っ直ぐに目を見る。曇りない金の瞳に吸い込まれそんな錯覚を受ける。

「では我に協力してくれるかね？」

それは不思議と頭の中で鮮明に響いた。甘く誘うような……。

「私の出来る範囲なら喜んで」

この時アリサは気づくべきだったのだ。自分の違和感に。神々しい笑みを浮かべ、ジルシールは強く手を握り返した。

そうして、ジルシールがアリサにお願いをしているところで、文字通り突然空気が震えた。周囲が騒がしくなる中、優雅にカップを

傾けていたジルシールは来たかね、と呟く。予想はしていたが、随分と荒々しい気配が伝わってくる。どうやらアリサを見るに、何が起こったのかも把握していないようだ。それでも落ち着いているのは、肝が据わっているのか自信があるのか、ただ暢気なだけなのかどちらにしる、想定通りなのだから問題はない。後は尤もらしい理由を付ければ、あちらが勝手にどうにかするだろう。出会って間もないが、確かにアリサはルーデリクスのリコルだった。これならばきつと……も気に入るに違いない。それだけ彼らにとって“花嫁”は別格だった。感情ではない。血が騒ぐのだ。手放すには惜しい。

「では頼めるかね？ ルドヴィーのリコル」

「判りました。ちゃんと話を聞いてきますから待っててください」
「ああ。楽しみにしているよ」

君が私の義妹となることを。アリサの手を引く小姓を一瞥し、ジルシールは指を鳴らした。

二人がいなくなったところで、控えていた侍従が新たにカップを三つ用意する。先程とは雲泥の差の香り高い芳香が満たしていく。
「お前達は下がっていなさい」

近づいてくる強大な力を前に、少年達は脂汗を滲ませながらも辛うじて立っていた。彼らなりに天王に仕える者としての矜恃がある。だが、ジルシールの命令で苦渋に顔を歪ませながらも消えていった入れ替わりにロシエが現れる。彼もまた顔色を真っ青に染めていたが、意識は保っていた。

「覚悟はしてたけど、マジでキツイな」

「随分と怒っているようだ。ふむ、君は一体何をしたのだね」

「俺じゃなくててめえだろうが！」

「なぜだね。私はきちんと招待状を送ったではないか」

「……招待状の意味がわかってねえだろ」

加担しておいて何だが、招待状とは相手の招待を促すもので、その場で連れ去るのはただの誘拐だ。最早招待ですらない。

一際近くで巨大な音が響き、ある一点を中心にして、花や地面に無数の亀裂が走っていく。それは天頂まで届き、呆気なく風景が碎けていった。現れたのは何処までも無機質な白の大地。そして漆黒を纏った男。

「久しぶりだね、甥っ子。折角美しい世界を作ったのだから、壊さないでくれないか？」

「……アリサは？」

「落ち着きたまえ。再会を祝してお茶でもどうかな？君達もそんな殺気立たないでくれ。我もすっかりで君達を壊したくないからね」

朗らかに告げられたそれは、側近達を震わせるのに充分だった。しかし、侵食する前にルーデリクスの魔力が跳ね除ける。

両者に見えない火花が飛び散った。

叔母甥 + 花嫁花婿 II ?

「叔父上……否。叔母上。アリサを何処に？」

滅多に声を発することのないルーデリクスが、玲瓏な響きを空気に乗せる。その声だけで他者を酔わせるような美しい響きだった。間近で多くを聞いてしまった側近達は勿論のこと、ジルシールですらも陶酔の世界に身を浸したい衝動に駆られる。ルーデリクスが本気になればこの場を支配することなど容易いことだ。それをしないのは天王の代理であるジルシールの顔をたてているからに他ならない。

「君も強情だね。私は落ち着きたまえと言っている」

しかし、動揺を顔に表すことなくジルシールはカップを傾けた。叔母上こそ強情だと内心毒づきつつ、ルーデリクスはほんの僅かに示した力の片鱗を消し去った。圧迫感が無くなったことでウォーリーとジェイル、それにロシエは安堵を浮かべる。「王」たる種族とそれ以外との力の差は分かっていたつもりだが、それでも別次元の存在だと改めて認識させられる。彼等は「王族」なのだから。

「あの子ならば、折角だからと我の花の顔を見に席を外しているだけだよ。二人は同郷のようだからね」

「……………」
「とうとう陛下も花婿を召し上げられたのですか。それはおめでとうございます。言ってくだされれば祝いの品を用意したんですけどねえ」

ルーデリクスの代わりに答えたのは、外交官でもあるウォーリー

だ。花嫁（婿）召喚の儀を行うならば、真つ先に知らされるはずなのだが、それすらなかったことに諦観を憶える。天界にとつても魔界にとつても後継者問題にはいつも頭を悩まされているのだ。それ故、”王族”に関わる婚姻の情報は何よりも重要なものである。

尤もそれは周囲のみで、当の本人達は子孫を残すという本能は、他の種族に比べると格段に低い。但し、唯一と定めた相手に対してはもの凄い執着を見せることでも有名である。その典型的な例が今代魔王陛下であり、先代魔王陛下も唯一の人物と添い遂げていた。契る際にかかる母体の負担が大きいために子孫も多くは望めず、だからこそ”王族”の数は圧倒的に少ない。近年では特にそれが顕著だった。

「あれはとても恥ずかしがりだね。奥に籠もったきりなのだよ。だからこそお披露目も控えていたのだが……恥ずかしいところを見せてしまったね」

花一つ魅了出来ない未熟者だ。

自嘲気味に笑うジルシールは誰かを想うように、視線を遠くへやる。これ程恋い焦がれているのに届かない。そんな気持ちに魔王に付き従っていた側近達の胸が締め付けられる……も、ルーデリクスの指が机を軽く叩いただけで、その感情は瞬く間に霧散する。自我を立て直した二人はルーデリクスに目礼し、己の未熟さを恥じた。

「ご託はいい。そこへ案内を」

「控えたまえよ、甥っ子。ここは我が身の内。幾ら甥っ子といえども領域を荒らすことは許さないよ」

術が破られたことには気付いているだろうに、ジルシールの態度

が変わることはない。ここで強引に突破するのもやぶかさではないが、そうなれば天界の半分が吹き飛ぶことは想定しなければならぬ。

……ここでやり合うのは得策ではない、か。

「……部屋を」

いかにも渋々という風体を醸し出しながら言うルーデリクスに、ジルシールは二つ返事で頷いた。

「暫くはゆっくりと滞在するがいい。……ロシエ」

「ったく。へーへー、準備はばっちりですよ」

「うん。では我自ら案内してやろう」

邪気のない笑顔でにこりと微笑むジルシールに、魔王一行は内心深く息をついた。

三回目の転移で漸く少年がアリサの手を解放した。普段ルードの転移に慣れているせい、それに比べて格段に精度の低い少年の転移は気持ち悪い。流石魔王、と妙なところで感心してしまった。

「こちらです」

へたれ込むアリサを気にすることもなく、少年は眼前の扉を開けて待っていた。天界に人の話を聞く相手はいるのだろうか？あまりにもマイペースすぎる。

コンコン

「もう良い加減にしてくれ！あんたの顔なんて見たくもない」

「陛下より魔王陛下のリコル様をお連れしました」

扉の向こう側でドンガラガツシャーンと派手な音が聞こえる。呼吸を二回するほど待って、扉が小さく開かれた。そこから伸びた腕がアリサの手を掴み、ぐいと引つ張られる。去り際に、後はよろしくお願いします、と聞こえたのが印象的だった。

内装は天王の趣味をこれでもかと盛り込まれたような随分と可愛いらしい部屋だった。特に花が象られた机と椅子は、部屋の主にとても良く似合う。

「全然嬉しくないコメントをありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

こちらは随分とまともなお茶を供されて、満足のようである。そんなアリサの態度に苛々しながら部屋の主はばんと行儀悪く机を叩いた。手元にあつた菓子受けとカップを死守したアリサは平然と座っている。

「褒めてるんじゃないー！」

「うん、知ってる」

「……あな、結構いい性格してるよな」

「そう？」

これくらい普通だと思う。アリサが拉致られるようにして連れ去られた理由が目の前の人物とあつては。

「あゝまあ、あの馬鹿の半分が俺のせいなのは認める。けどな、俺にだって事情があるんだ」

「疲れたからそろそろ帰りたいんだけど？」

「百歩譲って俺の顔が女顔だとして、だ。花嫁になんか成れるはずないだろ」

「じゃあ花婿で。はい、解決」

うじうじと鬱陶しい。男ならそれくらい努力で乗り越えろ！

今更ではあるが、アリサは何故ここまで来てしまったのか疑問でいっぱいだった。他人の恋路に関わるうなどと普段のアリサからは考えられない行動である。自身の不可解な行動に首を傾げていたアリサは、適当に相づちを打っていた。

「……ってわけだ。おい、聞いてんのか？」

「うんうん」

「そーいや、名前を言うのも忘れてたな。俺は仙堂葵。あんたは？」

「うんうん」

「……頼むから聞いてくれ」

「うんうん」

結局アリサの心の中で自己完結するまで、二人の会話が成立することはない。ことはなかった。

叔母甥＋花嫁花婿！！？（後書き）

お久しぶりです。ちゃんと生存してますよ。鈍亀更新ですけども。次の更新がいつになるかはまたも不明です……ごめんなさい、そんな目で見ないで（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241n/>

魔王様のリコル

2011年10月13日01時51分発行